

立花寺ワ

——立花寺遺跡第11次調査の報告——



2019

福岡市教育委員会

序

福岡市は、古くから中国大陆や朝鮮半島など東アジアとの文化交流の門戸として、また対外交易や外交の窓口として栄えてきた地域であります。このような歴史的環境のもとに、市内には数多くの遺跡が残されており、本市におきましては保護と活用に努めているところであります。しかしながら、都市の発展に伴う開発行為によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財については、事前に発掘調査を行って、記録保存を行っています。

本書は、博多区立花寺2丁目地内における保育園建設工事に先立ち実施した立花寺遺跡第11次発掘調査について報告するものです。この調査では、弥生時代から中世の集落跡を検出し、同時期の土器、陶器や石器などが出土しました。集落跡は、柱穴や土坑が多数あり、建物が何度も建て替えられたり、祭祀が継続的に行われたことが分かりました。また、水路として利用された古代から中世の溝は長期にわたって掘り返され、継続して利用されていたことが分かりました。さらに、弥生時代の溝や井戸跡では、水に対する祭祀が行われていたことも分かりました。その他、古墳時代に朝鮮半島の人々が当地に移住してきたことを示す「韓式系土器」も多く出土しました。これらの調査成果は、地域の歴史を考える上で貴重な発見となりました。

本書が、文化財保護への理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究資料として、また地域の歴史の学習の材料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、事業者様をはじめとする関係者の方々には、発掘調査から資料整理、報告書作成にいたるまで、ご理解と多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げる次第であります。

平成31年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

例 言

1. 本件は、福岡市教育委員会が、平成28年2月26日から同年7月8日まで発掘調査を実施した、保育園建設工事に伴う、立花寺11次調査の報告書である。差別調査は、建設工事によって構造が影響を受ける可能性がある範囲について行っている。
2. 構造の呼称は認証化し、構造構造をSD、土坑（土被窓、祭祀土坑等を含む）をSK、井戸址をSE、整穴構造（整穴作溝）をSC、獨立柱建物をSP、棚列をSA、柱穴などピット状構造をSP、その他の遺構（不明遺構、特殊構造など）をSXなどとした。
3. 本件の遺構図に用いる方位は、特に表がないものは北上南下（北界調査線）の北である。ただし遺構図によっては南北（N.S.）を用いており、その場合は別記している。北は真北から西偏約6°20'である（国土座標北からは西偏約6°40'）。調査地の国土座標（世界座標系）は、事業者が敷地面積を査定した測量測定会社により、敷地および周囲に国土測量基準点から座標移動した複数の基準点のデータをいただき使用した。また座標地の測定は、やや離れたところにある国土交通省が各所に設置した都市再生街区基準点の標高データから移動して求め、用いている。ただし、道路台帳地図に書かれた道路標高と比較し、レベル移動した数値がほぼ正しいことを検証している。
4. 本書に用いる遺構図の作成は、調査担当の久住猛洋（調査担当は福岡市埋蔵文化財調査課）および、坂口剛毅、立石真二（埋蔵文化財調査技能員）、梅野真吾（埋蔵文化財調査操作業務員）が行った。遺構の実測は、土器・陶器類は、土に平田春美（埋蔵文化財調査技能員）が行い、一部を林由三郎、野村英樹（技術員）、西田尚光（福岡大学大学院生）、久住が行い、復元時に久住が各図をチェックし一部修正した。石器の実測は久住が行い、今眞理は平田が実測し、久住が修正補足した。拓本は、小須賀子、松下伊都子（整理補助員）が採取した。また、本書に用いる図面の製図は、小畠、林由紀子（整理補助員）、野村、西田（技術員）、全体のチェックと一部の製図を久住が行った。
5. 本書に用いる遺構写真および遺物写真は、ほぼ全て久住が撮影した。ただし、今眞理のX線写真については、福岡市埋蔵文化財センターの機器を用いて松浦英輔（埋蔵文化財センター嘱託）が撮影した。
6. 金属器の諸び取り・保存処理は松浦京奈（埋蔵文化財センター）が行った。
7. 本書の執筆と編集は久住が行った。
8. 本調査に關する出土遺物と記録類（図面、写真等）は、全て埋蔵文化財センターに収蔵され、管理される予定である。

本 文 目 次

I.はじめに	1
II.調査の記録	6
1. 調査地点の位置と基本土層	6
2. 調査の概要	9
3. 検出遺構	11
4. 出土遺物	31
III.調査のまとめ	48
図版（PL.）	49



1. 第1面調査状況全景 (B~Gグリッド; 南から)



2. 第1面A東縁・B・Cグリッド遺構検出状況 (北東から)



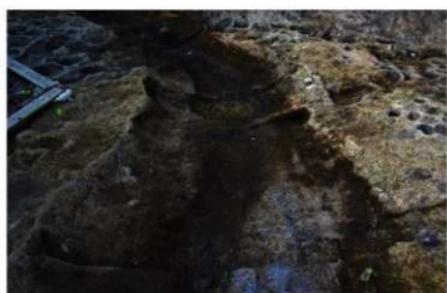
3. 第1面B~Gグリッド調査状況 (西から)



4. 第1面調査状況全景 (D~Gグリッド; 南東から)



5. 第1面SD357・253完掘状況 (南東から)



7. 第1面SD002-D区北・北側ベルト東西土層 (南から)

6. 第1面SD002-D・B区完掘状況 (南から)

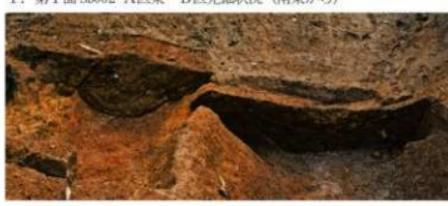
巻頭図版2



1. 第1面 SD002-A区東・B区完掘状況（南東から）



2. 第1面 SD002-D 区北側ベルト・南側 SD002 b (左), SD002 a (右) 挖削状況（北から）



4. 第1面 SD002 a・b-G 区南側断面土層写真（北から）



3. 第1面 SD002 a-E/G 区下層集中出土状況（北から）



5. 第1面 SD002-E/G 区中央トレンチ南側ベルト東西土層（北から）



6. 第1面 SD002-D 区南・南側ベルト東西土層（北から）



7. SD002-D 区南・北側ベルト東西土層（南から）

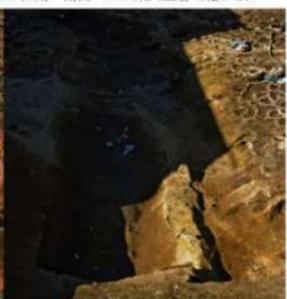


9. SD002 a・b-E/G 区掘削状況（南から）



8. SD002-D 区中央トレンチ北側ベルト東

西土層（南から）



10. SD002 a・b-E・G 区完掘状況

（南から）



1. 第1面 SP024・SX025・SX602
遺物出土状況（東から）



2. 第1面 SK631 遺物出土状況（南東から）

3. 第1面 SK150 土層（北から）



4. 第1面 SK013 遺物出
土状況（西から）



5. 第1面 SK003 遺物出土状況（南から）



6. 第2面調査状況全景および南側丘陵
地形（北西から）



7. 第2面調査区北西部（Aグリッド・B
西）遺構調査状況（北西から）



9. 第2面B・C・D西・E西グリッド遺構
検出状況遠景（北東から）



8. 第2面調査状況全景（南西から）



10. 第2面 SD002 より東側F・Gグリ
ッド遺構検出状況（北東から）

巻頭図版4



1. 第2面SE1002下層出土状況（東から）

2. 第2面下Gグリッド地山トレ
ンチ南東壁側土層（北西から）



3. SD2001-I／II区（II区西）ベルト土層（東から）

4. SD2001-III／IV区ベルト（IV区
西）土層メモ（図なし）（東から）

7. SD2001-I～III区遺物出土状況（東から）



5. 第2面下SD2001-II／III区ベルト（III区西）土層（東から）



8. 第2面下SD2001-I～III区遺物出土状況（西から）



6. 第2面下SD2001-2003最終掘削I区西土層（東から）



9. 第2面下SD2001-III区下層遺物出土状況（西から）



10. 第2面下SD2001-2003最終掘削状況（西から）



11. 第2面下SD2001-2003最終掘削状況（東から）

I はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区立花寺二丁694番1,694番3~6, 696番, 697番地内における保育園建設工事についての開発事前協議申請に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を、平成26年11月21日付で受理した（事前審査番号26-2-757）。これを受け、経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課事前審査係（部課名は当時）は、照会地が周知の埋蔵文化財包蔵地である立花寺遺跡（分布地図番号011-0038）に含まれ、かつ同一敷地の一部に建築された住宅部分について、すでに発掘調査（立花寺遺跡第3次調査、福岡市埋蔵文化財調査報告書第465集）が行われており、2面の遺構面と多くの遺構が検出されていることから、今回の保育園建設工事対象地においても埋蔵文化財の存在が明白であるものと判断した。また予定される工事は、建物基礎工事などで地下の埋蔵文化財に影響を与える可能性があり、記録保存のための発掘調査が必要になる可能性も高いであろうと判断した。この判断のもとに事業者との協議が行われ、今回の建設工事対象範囲における埋蔵文化財の深度や密度についてあらためて確認することになった。これを受け、平成27年10月16日に建設工事予定地における試掘確認調査を行った。その結果、埋蔵文化財は発掘調査済みの既存住宅部分から東側の工事予定範囲にも統いて存在し、その深度や遺構密度などから建設工事の埋蔵文化財への影響は避けられないことが明らかとなった。そのため、埋蔵文化財審査課と事業者の間で協議が重ねられ、建設工事による埋蔵文化財への影響が避けられない範囲について、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。これを受け、平成28年2月18日付で、事業者である社会福祉法人月隈保育園を委託者とし、福岡市長を受託者とする埋蔵文化財発掘調査業務に関する委託契約を締結し、同年2月22日から6月30日の期間で発掘調査を実施することになった。ただし、対象地には発掘調査期間中に移転予定の既存住宅の居住者がいたため、発掘調査対象となる敷地の整理や移転準備の調整のために実際の発掘調査開始は若干遅れ、関係者間の協議により2月26日から開始することになった。

発掘調査は、平成28年2月26日に開始した。当初の発掘調査開始日が遅れたこと、また全体として遺構が想定以上に濃密であったことから、途中委託者との間で協議を行い、調査終了日を若干延期することで合意し、発掘調査は平成28年7月8日に終了した。また発掘調査後の協議により、資料整理は平成29年度に行い、平成30年度に報告書を作成し、同年度末に報告書を刊行することになった。

2. 調査の組織

- ・調査委託：社会福祉法人月隈保育園
- ・調査主体：福岡市教育委員会（発掘調査 平成27・28年度・資料整理・報告書作成 平成29・30年度）
- ・発掘調査および整理・報告総括
　　経済観光文化局文化財部（平成27・29年度）・文化財活用部（平成30年度）
- 埋蔵文化財調査課（平成27年度）　　課長 常松幹雄
- 埋蔵文化財課（平成28・30年度）　　課長 常松幹雄（平成28・29年度）・大庭康時（平成30年度）
- 埋蔵文化財調査課第2係長　　榎本義嗣（平成27年度）
- 埋蔵文化財調査第2係長　　加藤隆也（平成28年度）・大塚紀宣（平成29・30年度）
- ・事前審査
　　埋蔵文化財審査課事前審査係　　板倉有大（平成27年度）
　　埋蔵文化財課事前審査係　　清金良太（平成28年度）・中尾祐太（平成29・30年度）・朝岡俊也（平成30年度）

・発掘調査および整理・報告庶務

埋蔵文化財審査課（平成27年度）・埋蔵文化財課（平成28年度）管理係 横田 忍

文化財保護課（平成29年度）・文化財活用課（平成30年度）管理調整係 松原加奈枝

・発掘調査および整理・報告担当

埋蔵文化財調査課（平成27年度）埋蔵文化財課調査第2係 文化財主事 久住猛雄

＜調査基本情報＞

遺跡名	立花寺遺跡	調査次数	11次	調査略号	RGG-11
調査番号	1540	分布地図図幅名	011 金隈	遺跡登録番号	020038
申請地面積	2,143.8m ²	調査対象面積	312m ²	調査面積	325.2m ²
調査期間	平成28(2016)年2月26日～同年7月8日			事前審査番号	26-2-757
調査地	福岡市博多区立花寺二丁目694番1,694番3～6, 696番, 697番				

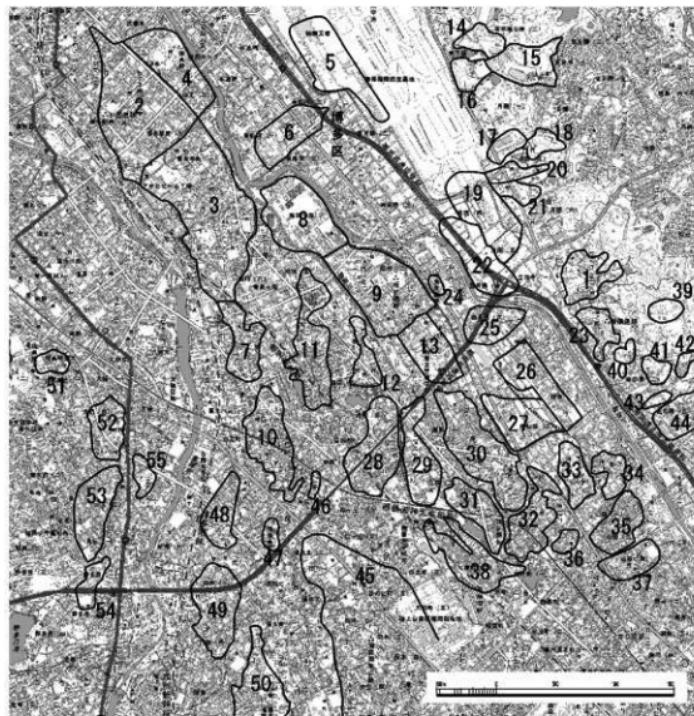


Fig. 1 立花寺遺跡の位置と周辺遺跡分布図（1/40,000）

*この分布図は遺跡（埋蔵文化財包蔵地）の全ては記していない。1が立花寺遺跡。他の遺跡（包蔵地）名は次頁参照。

3. 周辺の地理的歴史的環境

立花寺遺跡は、福岡平野の東を画する月隈丘陵の南部西側に立地する。丘陵斜面は開析作用が著しく、丘陵頂部を独立丘状に画し、その間は丘陵間の低い鞍部でつながるか、谷部により隔てられる。当遺跡周辺の月隈丘陵には、南側の国史跡金隈遺跡など弥生時代の遺跡が多く、また南半分には持田ヶ浦古墳群、堤ヶ浦古墳群など、古墳時代後期から飛鳥時代の群集墳も多く分布する。当遺跡の所在する「席田郡」には、明治初年（近世末期を踏襲）の段階で、金隈村、立花寺村、上月隈村、下月隈村、雀居村、平尾村、青木村、上臼井村、下臼井村が存在した。その前の「正保筑前国絵図」（17世紀中頃）の写しとされる文化・文政年間の「筑前国十五郡三図」（18世紀後半）には、「蓮田郡」に、下臼井村、上臼井村、青木村、平尾村、下月隈村、上月隈村、龍華寺村、金隈村が見える。また席田郡は「和名類聚抄」（10世紀）に見える令制以来の郡名だが、もとは三郷（石田郷、大國（久爾）郷、新居郷）で南北に細長く、美濃国の同名郡のように那珂郡から渡来人入植に関わり分置された可能性がある。実際に席田郡域およびその南に接する御笠郡大野郷域は、後述するように古墳時代後期から飛鳥時代の渡来人（帰化人）に関わる考古学的痕跡が多い。「席田郡」は美濃国（岐阜県）にもあり、美濃国席田郡は和銅八年（715年）に本郡より分置されたもので、新羅系帰化人の入植記録があることが参考になる。立花寺遺跡はそのような地理的歴史的環境にあり、実際に今回の調査で検出された古墳時代後期後半～飛鳥時代初頭の韓式系土器や、立花寺5次調査で複数見つかっている新羅土器の存在は、そうした想定を裏付け、また古代官道（山陽道）に設けられた「久爾駅」は、席田郡の「大國（久爾）郷」と通ずる可能性がある。ただし律令制（奈良時代以降）の古代官道（水城東門ルート）は「那珂郡」を直線的に通る。福岡市内の遺跡では、井相田E・井相田C・高畠・板付・那珂・比恵の各遺跡（群）で古代官道の道路遺構が検出されている。高畠遺跡で「廐寺」と想定される遺構や瓦類は、山陽道の「久爾駅」である可能性がある。一方、席田郡の「大國（久爾）郷」はその元地名であるならば、奈良時代以前の先行官道が月隈丘陵西麓を通り、原「久爾」駅があつた可能性がある。その可能性を示すのが、本調査（立花寺11次）とは小丘陵を挟んだ南側の立花寺5次地点であり、ここには飛鳥時代の総柱建物や長舎建物、これらを区画する溝があり、初期の官衙遺構の可能性が高い。初期の「久爾駅」あるいは、「古今著聞集」に見える「蓮田駅」の一部の可能性がある。官衙ないし古代の郡司層の居館と思われる遺構群が立花寺2次にある。奈良時代～平安時代前期の掘立柱建物群、輸入陶磁器、綠釉陶器、石製権などが検出されている。この2次地点でも、古墳後期～飛鳥時代の土器とともに、外面タタキ（格子目、平行、縄文？）、内面無文ないし特殊な当具の韓式系土器らしきものが出土している（福岡市埋蔵文化財調査報告書第321集Fig57・58）。

立花寺遺跡は月隈丘陵の西麓に立地するが、この月隈丘陵は、三郡山地から派生して四王寺山、金隈を経て月隈へと連なる小山塊で、その基盤層は第三紀層の堆積岩からなり、さらにその下部には花

1. 立花寺遺跡（本報告）
 2. 比恵遺跡群
 3. 那珂遺跡群
 4. 山王遺跡
 5. 雀居遺跡
 6. 東那珂遺跡
 7. 五十川遺跡
 8. 那珂君体遺跡
 9. 板付遺跡
 10. 井尻B遺跡
 11. 諸岡A遺跡
 12. 諸岡B遺跡
 13. 高畠遺跡
 14. 久保闇遺跡
 15. 宝満尾遺跡
 16. 席田大谷遺跡
 17. 下月隈天神森遺跡
 18. 下月隈A遺跡
 19. 下月隈C遺跡
 20. 下月隈B遺跡
 21. 上月隈遺跡
 22. 立花寺B遺跡
 23. 金隈遺跡
 24. 板付東遺跡
 25. 井相田D遺跡
 26. 仲島遺跡（大野城市城合む）
 27. 井相田C遺跡
 28. 鮎原遺跡
 29. 三筑遺跡
 30. 麦野A遺跡
 31. 麦野B遺跡
 32. 麦野C遺跡
 33. 井相田E遺跡
 34. 川原遺跡
 35. 三笠森遺跡
 36. 井相田B遺跡
 37. 宝松遺跡
 38. 南八幡遺跡
 39. 親ヶ浦古墳群
 40. 金隈上屋敷遺跡
 41. 影ヶ浦遺跡
 42. 影ヶ浦古墳群
 43. 堤ヶ浦古墳群・持田ヶ浦古墳群B群
 44. 持田ヶ浦古墳群・持田ヶ浦古墳群F群（今里不動古墳）
 45. 須玖岡本遺跡群（春日市）
 46. 井尻C遺跡
 47. 寺島遺跡
 48. 横手遺跡
 49. 佐道遺跡
 50. 弥永原（・佐原）遺跡
 51. 野間B遺跡
 52. 大橋E遺跡
 53. 野多目B遺跡
 54. 野多目A遺跡
 55. 三宅C遺跡
- （※各包蔵地の範囲は厳密ではない部分がある。最新情報は各市担当窓口によられたい。）

表1：周辺遺跡分布図（Fig.1） 遺跡名表

崖があるため、表層は浸食の程度により双方の岩石がみられる。眼下には四王寺山系や牛頭丘陵に源流を発する御笠川が博多湾に向かって北流している。なお、およそ御笠川のラインが、（旧）那珂郡と（旧）席田郡の境界となっている。御笠川右岸の席田郡にあたる範囲の月隈丘陵との間には、狹小な沖積平野あるいは扇状地が形成されており、これらの丘陵、扇状地、沖積地には、弥生時代から古代の集落域や墳墓域が多く形成され広がっている。

立花寺遺跡の周囲、御笠川中流域右岸に分布する遺跡を概観すると、その立地条件から、丘陵上または丘陵間あるいは丘陵裾の扇状地、および沖積平野に占地するものの二つに大別される。ただし、遺跡によっては両者にまたがるものもある。まず丘陵上における明確な遺跡の出現は、弥生時代前期初頭に始まる。影ヶ浦遺跡や持田ヶ浦遺跡、上月隈B遺跡、宝満尾遺跡などで前期～中期初頭（影ヶ浦では中期末まで存在する）の貯蔵穴群が出現し展開するが、前期段階での住居群などは不明確である。ただし下月隈天神森遺跡では前期初頭からの墳墓域がある。弥生時代中期になると、堅穴住居や掘立柱建物などからなる居住域（集落域）が、下月隈A・B遺跡、席田大谷（・赤穂ノ浦）遺跡、久保園遺跡、中尾遺跡など広範囲にわたって展開する。立花寺遺跡もその一つである。特に久保園では、5×8間の超大型掘立柱建物が中期にある。赤穂ノ浦では鹿を描いた横帯文銅鑄錫型が、席田大谷では銅戈錫型模造品があり、青銅器铸造が行われた可能性がある。中期以降の墳墓遺跡では、席田青木遺跡、宝満尾遺跡、下月隈天神森遺跡、上月隈遺跡、金隈遺跡などがあり、土壙・木棺墓群や甕棺墓群、後期の足元掘込土壙墓群などがある。上月隈3次の7号甕棺墓（中期後半）には、研ぎ分けのある中細形銅劍Bとガラス玉が副葬されていた。特定集団の墓域であろう。宝満尾の足元掘込土壙墓・土壙墓群（後期初頭～後期後半）にも、前漢末の銅鏡（2号足元掘込土壙墓；後期前半）や、素環頭刀子（13号石蓋土壙墓；後期後半）、ガラス玉（15号土壙墓；後期後半）が副葬されていた。宝満尾は上位階層（特定集団）の墓域であろう。それに対して国史跡金隈遺跡は、前期後半の土壙墓から中期～後期初頭の甕棺墓、後期初頭～前半までの足元掘込土壙墓が累積した、一般層の大型墓群である。展示公開されている部分は遺跡の一部であり、この墓域は周囲の複数の中小集落の共同墓地であった可能性がある。立花寺遺跡もその対象の可能性があろう。古墳時代になると、古墳前期の古墳は不明確だが、より南の大野城市域（旧御笠郡大野郷）に、前期の推定前方後円墳（赤坂山御陵古墳；三角縁神獣鏡出土）を盟主とする御陵古墳群が存在する。福岡市城側（旧席田郡）では、多くは後期古墳（一部飛鳥時代）だが、丘陵西側の舌状突端部にあった水町古墳のみは中期末の大型円墳である。墳頂部に横穴式石室の残骸があるが、これは中期古墳（木棺直葬？）の上に新たに作られたものと思われ、石室の型式と墳頂祭祀器群（高环形器台や内面ナデ消しの大甕、陶質土器）と時代が合わない。中期末（須恵器TK23?）の古墳を後期後半（6世紀後半～末）に新たに石室を造営し再利用したものだろう。水町古墳は古い地形図によると径30m前後となる。これは後述する立花寺B遺跡の古墳中期後半（TK208）～後期中葉（TK10）の集落に対応するものだろう。後期には丘陵各所に群集墳が造営される。宝満尾古墳群、席田大谷古墳群、丸尾古墳群、天神森古墳群などだが、これらは造営端緒が中期後半に遡るものがあり、およそ月隈丘陵の北側に造営される。かつついでも数基単位で10基に満たない最小単位の古墳群である。立花寺遺跡東～南東側の後背丘陵には、立花寺古墳群、笠ヶ浦古墳群、文殊谷古墳群、金剛山古墳群、七曲古墳群があるが、いずれも2～6基と10基に満たないのは月隈丘陵北側の古墳群と同じで、ほぼ後期古墳である。なお笠ヶ浦古墳群北側には独立的なやや大型の円墳が現存しており、中期古墳の可能性がある。一方、丘陵の南側に分布する堤ヶ浦古墳群や影ヶ浦古墳群、持田ヶ浦古墳群各群は数十基からなる大規模な古墳群であり、月隈丘陵の南側は北側～中央部と好対照をなしている。この大規模な古墳群の分布状況は、そのまま大野城市域北

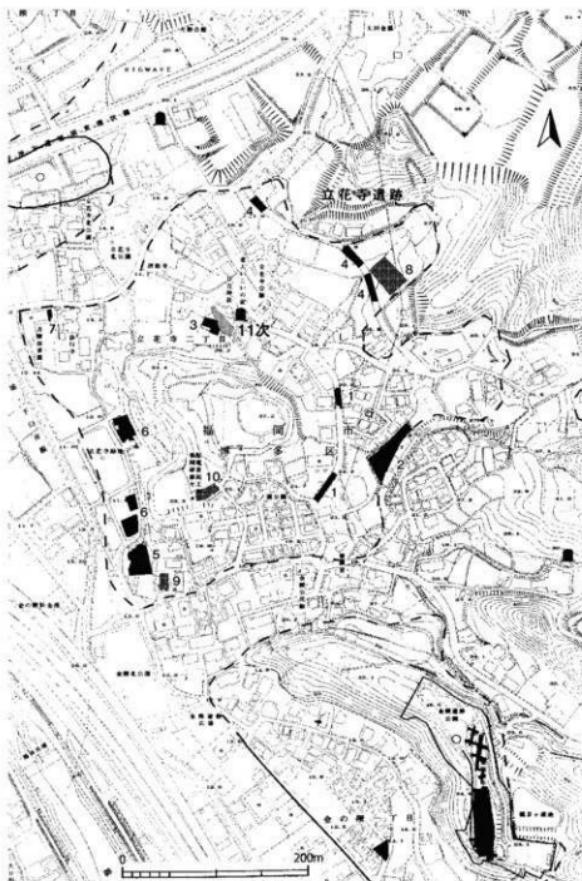


Fig.2 立花寺遺跡の範囲と調査地点分布図 (S=1/5,000)

跡、立花寺B遺跡などが広がっている。これらの遺跡では、弥生時代早期の突帯文土器期に集落域が成立し（雀居、下月隈C）、中期初頭までの集落がますます継続している。その後、造構数の増減があるが（たとえば雀居では弥生時代中期前半～後期前半はごくわずか）、弥生時代後期中頃以降古墳時代前期前にかけて比較的大規模な集落が成立する。雀居では後期中頃掘削の環濠集落が終末期まで継続し、超大型建物や、組合式机（案）などの精巧な木製品、楽浪土器など半島系土器を含む多くの外来系土器を出土するなど、交易に関わる集落とみられる。最近では環濠最下層とみられる石製品の一つが（報告では突帯文期溝上層とするが異なる）「板石硯」であることが判明した。「案」は「文机」としても使われた可能性がある。下月隈C遺跡では、いくつもの井堰と竪穴住居を含まない掘立柱建物群による集落域があり、水田農耕に特化した集落の可能性がある。下月隈Cは古墳時代前期前半まで、雀居は中期初頭まで遺跡が主要地点を変えながら継続する。この時期の水田跡自体は不明確

部、旧御笠郡大野郷の古墳群（群集墳）の分布状況に統いている。また持田ヶ浦古墳群には、古墳後期末～飛鳥時代初頭（TK209期=須恵器IV期初頭）に、径30m強の規模で、大型横穴式石室を有する今里不動古墳が築かれている。群集墳の盟主墳という以上に、福岡平野単位の盟主の大首長墓であろう。「伝今里」との金銅装馬具（杏葉）があるらしく、今里不動出土であろう。その他、7世紀後半（飛鳥時代後期：須恵器VI期）には、月隈丘陵の北側の席田青木で単独的な席田青木1号墳が築かれる。石室は小型化しているが、時期的な状況からみて、これは席田郡（評）の首長墓と考えられる。

丘陵地とは別に沖積地の微高地には、雀居遺跡や下月隈C遺

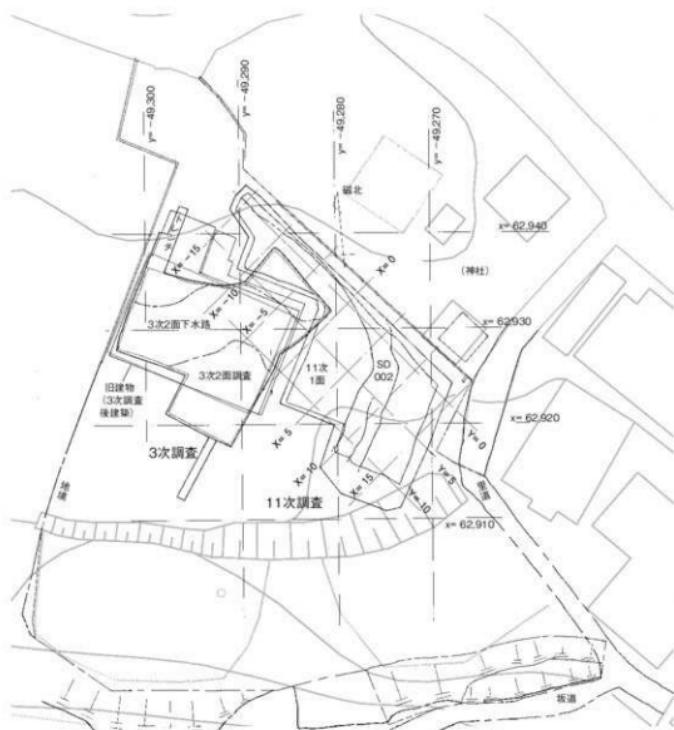


Fig.3 立花寺3次・11次周辺地形図 調査区位置図 (S=1/500)

なところが多いが、多数の水路と井堰からその存在が推定できる。その後、古墳時代中期前後のある時期の集落が不明確となる。しかし中期後半になると立花寺B遺跡の微高地に集住的な集落が形成され、水辺の祭祀では高壇形器台や子持勾玉などが廃棄され、馬韓系陶質土器や木製馬具なども出土している。その後、古墳時代後期、飛鳥～奈良時代の集落は丘陵裾や丘陵間の扇状地の立花寺遺跡に移るようである。立花寺遺跡の丘陵裾部にあたるラインには、奈良時代の「山陽道」成立に先行する「道路」とそれに伴う原「久爾」駅があった可能性は述べた。平安時代も立花寺遺跡を中心に遣構が展開するが、沖積微高地の立花寺B遺跡や下月隈C遺跡に再び集落が営まれる。立花寺Bでは平安時代初期から前期の初期の輸入陶磁器類があり、下月隈Cでは「皇后宮職」と記された木簡が、人形や斎串、墨書き土器など奈良時代後半の流路から出土しており、近くに官衙関連施設があった可能性がある。この場合、周辺の遣構・遺物の状況からは、やや上流にあたる立花寺遺跡にあった官衙がそのまま本簡などの廃棄祭祀の執行主体ではないかとも考えられるが、再検討を要する資料である。

II. 調査の記録

1. 調査地点の位置と基本土層

立花寺11次調査地点は、調査地点は遺跡の中央や北側の丘陵間の鞍部に位置し（Fig.2）、西側と北側が低い。調査地点の周囲は北側で標高15.2m、南側で標高19m前後である。11次調査は3次調査

の東側に接し（一部重複している：Fig.3）、3次調査（福岡市埋蔵文化財調査報告書第465集）と同様に、遺構面を2面認識して調査した。第1面はGL-70～100cmの飛鳥時代末前後の橙色土整地層の上部またはその直下の灰褐色～暗褐色土とした。次に第2面は第1面から20～30cm前後下げた灰黄色～黄褐色シルトまたは粘質土層上面とした。第1面と第2面の間には、一部黒褐色土包含層が挟むが、これは旧流路上部の埋没層であったり、東側では竪穴住居などの遺構の重複層であると見られる。第2面での地山は黄褐色～黄灰色の粘質シルト、あるいは一部は周囲の第三紀層が侵食作用で崩れた砂礫層、あるいはシルトと砂礫の混合層である。調査区壁面の土層は、柱状土層図を多数記録したのでこれを参照されたい（Fig.4）。また南側丘陵部分に向かって地山面が高くなる斜面の途中にはトレーニングを入れ（G区SD002東岸試掘トレーニング：X=14～16、Y=5～7）、下部の地山土層を確認した（Fig.4右下）。そのほか、深く掘削した2面検出の井戸SE1002では、井戸壁面で下部の地山堆積を確認している（Fig.14）。なお、壁面柱状土層01～13の各位置は次の通りである（表2）。

表2：壁面柱状土層01～13（Fig.14）の位置 <凡例>「グリ」＝グリッド

土層01：A東グリ北壁X=13.5～14、土層02：A西グリ北壁X=5～5.5、土層03：Bグリ北壁X=0～0.5、土層04：Dグリ北壁X=5～5.5、土層05：Dグリ北壁X=8～8.5、土層06：Fグリ北壁X=11.5～12、土層07：Fグリ東壁Y=0.5～0、土層08：Gグリ東壁Y=8～8.5、土層09：Gグリ南壁、上部X=9.2～9.7／下部X=8～8.5、土層10：Eグリ南壁X=4.5～5、土層11：Cグリ西壁Y=9.5～10、土層12：Cグリ西壁Y=6～6.5、土層13：Aグリ南壁X=9.5～10

また、3次調査区との重複部分（Aグリッド）の第2面検出面標高の比較で判明したことだが、今回の調査のレベル基準（標高）と3次調査のレベル標高が異なるらしく、約70～75cmほど3次の標高記録

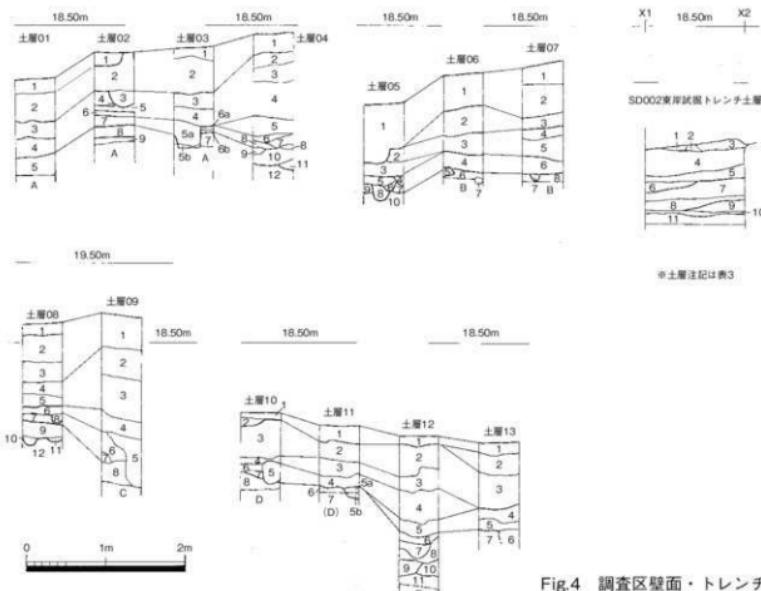


Fig.4 調査区壁面・トレーニング
土層図 (S=1/60)

が高い。3次は月隈小学校の水準点（L=18.683m）から移動とのことだが、本来は同じレベルでないとおかしい。本調査は国土交通省設置の街区基準点標高から移動したが、結果的に周囲の道路台帳地図（都市計画図）に記された道路標高と、今回移動したレベル基準からの計測値は合致している。したがって、今回（11次）のレベル基準が正しく、3次調査のレベル基準は、レベル移動の際の計算などで何らかの誤誤が生じていると判断するが、正確に何cmずれているかは不明確である。およそ70~75cmの間であろう。ズレの正確な数値が不明なため、3次調査とまたがって存在する第2面下の溝や（3次SD15、11次SD2001.2002.2003）、掘立柱建物の柱穴（3次SB01、11次SB01）は、その面の接合・復元時に支障が生じている。さらに3次調査の調査区の位置関係も、今回の重複部分を測量した結果では、周囲地割との関係で、若干のズレが生じていることが明らかになった。その実際の位置関係はFig.3の通りであり、3次調査報告書とは多少異なることを報告し、訂正するものとしたい。

表3：壁面土層01～13、Gグリッド試掘トレンチ土層注記

土層01：1.砂利（パラス+真砂土）、2.灰褐色砂質土+黄色シルト混入（盛土）、3.黒褐色土（大小レキ混じり多）、4.暗褐色シルト（中～大レキ混じり）、5.黄灰白色粘質シルト+褐色シルト混入、A. 暗灰～褐灰色砂礫層（地山）／**土層02：**1.砂利+灰褐色砂質土、2.灰褐色砂質土+黄褐色シルト混入（盛土）、3. 黑褐色シルト+黄白色～黄褐色粘質土混入、4.暗褐色シルト、5.暗黄褐色シルト+黒褐色シルト、6.灰褐色～灰黃褐色シルト、7.灰黄褐色シルト、8.灰黄色～灰黃白色シルト+砂粒混じり、9=A.黄灰白色シルト、しまりあり／**土層03：**1. 砂利+灰黄褐色シルト（カクラン）、2.灰黄褐色～灰褐色シルト+砂利少（盛土・カクラン）、3.黒褐色シルト+黄褐色シルトブロック+砂粒多混じる、土器・炭含む、5a.（上部）暗灰褐色シルト（4層）、（中部以下）暗灰褐色～にぶい褐色シルト、5b. 灰褐色～灰灰褐色シルト、6a. 暗褐色シルト、6b. 暗黄褐色～にぶい灰褐色シルト、7.灰褐色シルト、A. 黄灰～灰黃褐色シルト（地山）／**土層04：**1. 黄灰白色真砂土（盛土・カクラン）、2. 黑褐色土+砂利少（旧表土）、3. 暗褐色シルト、4. 黄褐色（～にぶい黄褐色）シルト、5. 黄灰白色シルト+（暗）褐色シルト少、6. 黄灰～灰黄褐色シルト+砂礫、7. 白灰～灰黃色シルト、8.灰黄色シルト+にぶい黄褐色シルト+砂礫、9.淡黄灰褐色～灰黃色シルト+砂礫多、10.淡黄灰褐色～灰黃色シルト+砂礫、11. 黑褐色シルト+砂礫、12.灰白～灰白色粘性シルト（地山）／**土層05：**1. カクラン（上層・灰褐色+灰黃色土主体、下部・にぶい（暗）灰褐色シルト+大小レキ）、2.暗黄褐色～にぶい黄褐色シルト、3. 暗灰褐色シルト+淡黄褐色シルト、4.黄褐色～黄褐色シルト、5.淡灰褐色シルト+レキ少、6.灰褐色シルト～（暗）黄褐色シルト、レキ少、7.明黄灰色シルト、8.にぶい淡灰褐色シルト+レキ少、9.明黄灰色シルト、10.黄灰～灰白（浅黄）色シルト（地山）／**土層06：**1.パラス+真砂土+暗灰褐色土（盛土・カクラン）、2.暗灰褐色シルト、3.灰黄褐色～黄褐色シルト+灰白色シルト少、ブロック状に混じる、4.上部・暗褐色シルト+黄褐色シルトブロック混入～下半・灰白～灰黃色シルトブロック状混入+レキ・土器、5.黄灰色シルト+砂礫、レキ、6. 黄褐色シルト～淡灰黃色シルト、7. 6層+灰白色シルト+褐色シルト／**土層07：**1.暗褐色土（表土）、2.にぶい黄褐色土+暗褐色土（旧表土・根カクラン）、3.灰（黄）褐色シルト、4.褐色シルト+黄褐色シルト、5.暗黄褐色シルト、6.暗褐色シルト、7.暗（黄）褐色シルト、8.黄色～黄褐色粘質シルト+暗褐色シミ／**土層08：**1.パラス+真砂土（砂利）2.明黄褐色土3.黄褐色シルト、4.暗（黄）褐色シルト（暗褐色+黄褐色シルト）、5.明黄褐色～灰黃色シルト、6.灰黄褐色シルト+褐色シルト、7.黄褐色シルト+暗褐色シルト混入、8. 暗褐色シルト+黄褐色シルト混入、9. 暗褐色シルト+黄褐色シルト混入少、10. 黄褐色シルト+暗褐色シルト、11.暗褐色シルト+黄褐色シルト、12. 黄褐色シルト（地山）／**土層09：**1.（黄）灰褐色土、2.暗褐色シルト+黄褐色シルト、3.暗黄褐色シルト+白色砂粒混入、4.黑褐色～暗褐色シルト+白色砂粒混入、5.暗黄褐色シルト、6.ややにぶい黄褐色シルト（再堆積）、7.暗（黄）褐色シルト、8.明黄褐色シルト（地山）／**土層10：**1.表土（灰黄褐色土）、2.暗褐色土、3.黄褐色シルト+白色砂粒多く混入、4.（黄）灰褐色～灰褐色シルト、5.灰褐色～褐色シルト、6. 灰褐色～灰黄褐色シルト、7.灰灰褐色シルト、8.黄褐色～黄白色シルト+砂粒混入少（地山）／**土層11：**1. 表土（上部・暗褐色土～下部・暗褐色土）、2.黄褐色～灰灰褐色土+砂粒多く混入（旧表土）、3.（暗）灰褐色シルト+黒褐色シルトブロック+砂粒多く混入、4.暗褐色～黑褐色粘質シルト（包含層）、5a. 暗褐色～褐褐色シルト+黄褐色シルト少、5b. 黑褐色シルト+黄褐色シルト、6.黄褐色～灰黄褐色シルト、7. 喀黃褐色～にぶい黄褐色シルト（地山？）／**土層12**（下部SD2001ほか）：1.カクラン（表土）、2.黄灰褐色土、3.灰褐色シルト+砂粒多く混入、4.黑褐色粘質シルト（堅くしまる）、5.褐灰色シルト、6.灰黄褐色シルト、7.灰褐色砂利、8.灰褐色砂質シルト、9.灰褐色砂利、10.褐灰色シルト・砂、11.灰褐色シルト・砂／**土層13：**1.砂利（パラス+真砂土）、2.暗黄褐色土、3.褐色シルト、4.暗黄褐色粘質シルト、5.黑褐色粘質シルト、6. 黑褐色～暗褐色粘質シルト、7.灰白色粘質シルト+暗褐色シルトシミ、（さらに下部は灰褐色シルト+砂礫=地山か）／**Gグリッド試掘トレンチ土層：**1.黄白色シルト+黑色シルト混入、2.4層のブロック、3.黑褐色～暗褐色シルト+黄色シルト混じり、4.黄色粘質シルト+砂利混じり、5.灰白～灰褐色粘質シルト+砂利混じり、しまりあり、6.暗褐色粘質シルト、7.黑褐色粘土、しまりあり、遺物なし、8.黑褐色粘土、9.灰黄白色シルト+砂利混じり、10.黑褐色～暗褐色粘土、しまりあり、11.灰褐色粘土、しまりあり

2. 調査の概要

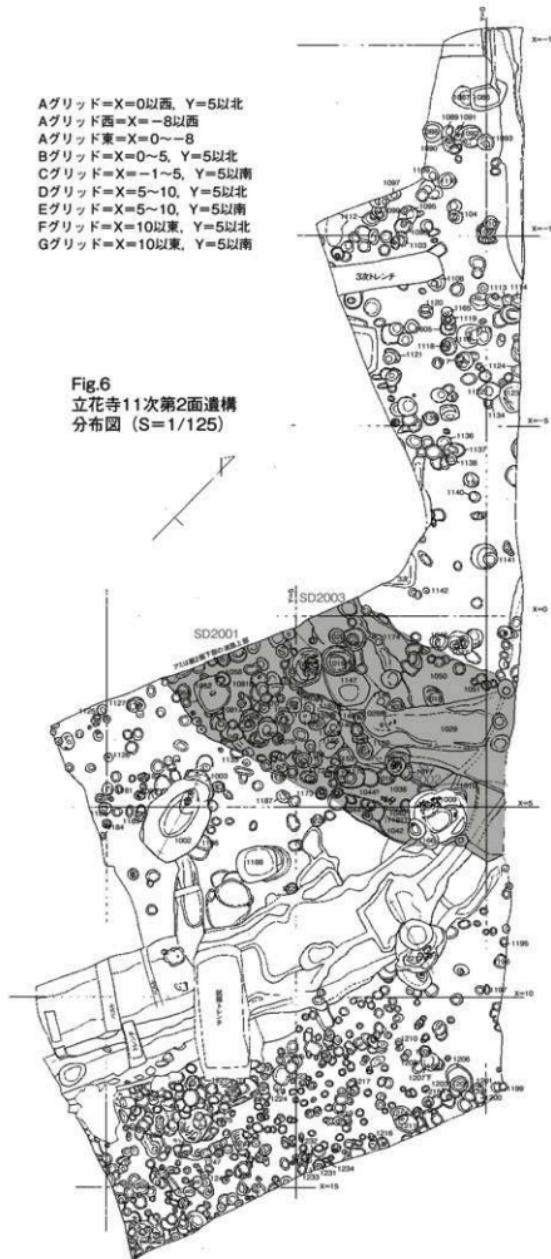
調査地点は立花寺遺跡の立地する丘陵間の鞍部に位置し、西側と北側が低い。調査地点の周囲は北側で標高15.2m、南側で標高19m前後である。11次調査は3次調査の東側に接し、3次調査と同様に遺構面を2面認識して調査した（前節参照）。第1面では、古墳時代後期ないし飛鳥時代以降のピットおよび土坑多数、溝（水路）数条、第2面では古墳時代中期から飛鳥時代および弥生時代中期から後期のピット・土坑多数、井戸2基、溝（水路および旧流路）数条を検出した。堅穴住居の可能性があるものもあったが、不明確である。1・2面ともにピットは多数検出したが、根固めあるいは礎板状に躰を据えるもの、柱痕があるものも多く、建物や構列などが多くあったと見られるが、ピットがあまりにも多く、建物の復元が難しかった。第2面で、比較的確実な2棟のみ復元し、報告する。第1面の水路SD002は北流して調査区を東西に画

Fig.5
立花寺11次第1面遺構分布図 (S=1/125)



Aグリッド= $X=0$ 以西, $Y=5$ 以北
 Aグリッド西= $X=-8$ 以西
 Aグリッド東= $X=0 \sim -8$
 Bグリッド= $X=0 \sim 5$, $Y=5$ 以北
 Cグリッド= $X=-1 \sim 5$, $Y=5$ 以南
 Dグリッド= $X=5 \sim 10$, $Y=5$ 以北
 Eグリッド= $X=5 \sim 10$, $Y=5$ 以南
 Fグリッド= $X=10$ 以東, $Y=5$ 以北
 Gグリッド= $X=10$ 以東, $Y=5$ 以南

Fig.6
立花寺11次第2面遺構
分布図 (S=1/125)



し、西側の遺構面が高くなる。中世に何度も掘り直しされたとみられるが（最後は近世初頭か）、第2面の調査時の井戸との関係から、古代末のある時期に一度掘削され、その後何度も繰り返し掘り直しされて継続していた可能性が高い。第2面でこれを切る中世初頭の井戸SE1247と、これと別に弥生時代中期末～後期初頭の井戸SE1002を検出した。弥生時代の井戸は検出面から-3m前後と深く、激しく湧水があり、井戸廃棄時の出土レベルから見て、数度の祭祀行為に関わる土器が検出された。第2面中央では、第2面遺構下部に弥生時代の旧流路ないし水路があり（SD2001・2002・2003）、当初のSD2003は下部の礫層まで及んでいる。その埋没後に何度も水路として掘削された状況が把握された（SD2002, SD2001およびその上部の溝状遺構）。水路の底面は調査区中央が高いが湧水があり、湧水利用で東西に水流するとみられる。この水路にも祭祀土器の廃棄が何か所も

見られた。井戸SE1002との位置関係と同時性から、「水の祭祀」が意識された状況が把握される。

出土遺物は、総量パンケース40箱がある。弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、輸入陶磁器、国産陶磁器、瓦質土器、石器（弥生時代）、滑石（結晶片岩含む）石材（石錐未成品など）、木片など有機質遺物がある。朝鮮半島系無文土器（粘土帶土器）2点と、古墳時代後期ないし飛鳥時代に属する韓式系軟質土器が多数見られたことも特筆され、「席田郡」が渡来人に関わる土地であることを裏付ける成果と思われる。

3. 検出遺構

検出遺構は、第1面（Fig.5）、第2面（Fig.6）・第2面下部（Fig.7）ともに非常に多く、本報告では、この遺跡の概要、傾向を理解できる範囲の主要な遺構のみについて報告する。また出土遺物については、この節（「検出遺構」）の次に、「出土遺物」という節でまとめているので、それと対比していただきたい。

（1）第1面および第1面下部の遺構（Fig.5）

- ・溝状遺構（SD）



Fig.7 第2面下 SD2001・2002・2003平面図 (S=1/62.5)

SD002 (Fig.8,9,18、巻頭図版1-6,7、同2-1~10、PL.3-1~5)

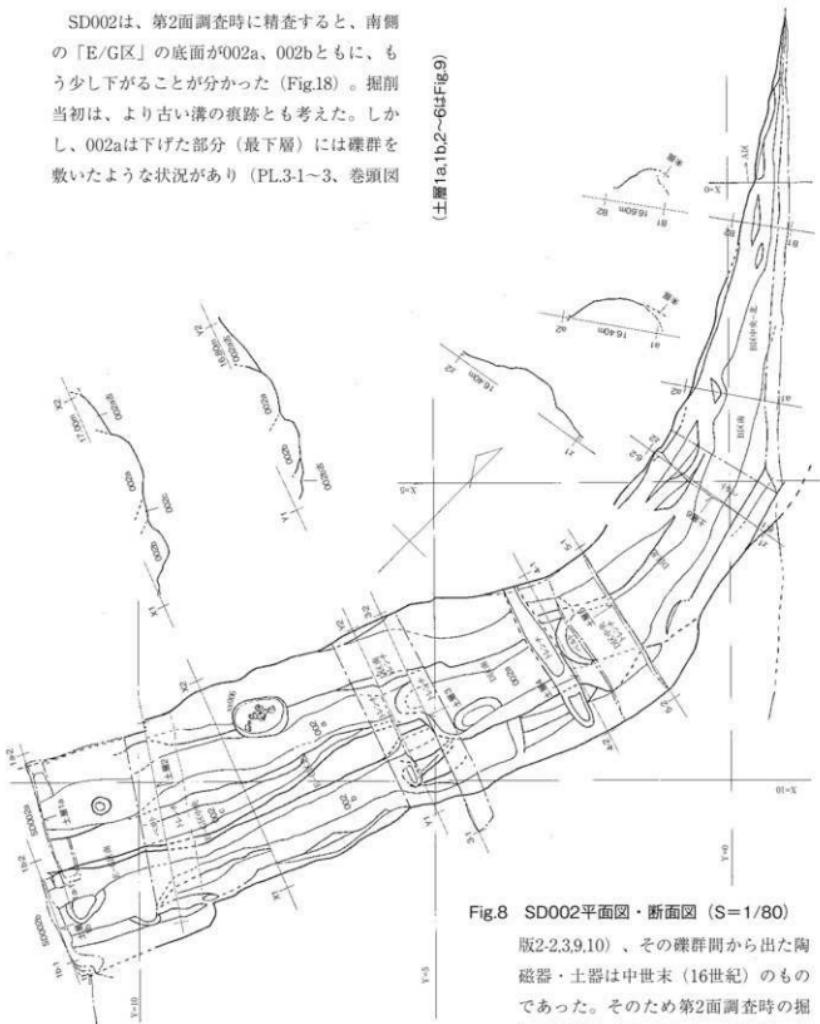
1面GグリッドからAグリッド東側にかけて流れる溝状遺構。はじめ南→北に走行し、途中で東→西に向きを変える。西側は、次のSD357に続くものとみられる。溝の幅は、あくまでも検出レベルでの幅であるが、2.25m~3.7m前後である。断面であるが(Fig.9)、溝の南半分では底面が二つに分かれるのが明らかで、2本(以上)の溝の重複であることが分かる。西側のSD002aと東側のSD002bである。いずれも「U」字状ないし逆台形で底面がやや丸みをもつ断面形である。溝の最も南側(Fig.9の「土層1」)で顕著だが、地形の関係から西側のSD002aが深く、東側のSD002bが浅く、検出面が高い。002aは、平面(Fig.8)と断面(Fig.9「土層3」)の観察から、002bを切る。さらに、両者の間にいずれにも属さないより古い溝覆土(SD002c)の痕跡がある(「土層1」~「土層3」)。また土層断面を切ったところだと分からないが、第2面で検出したSE1247との関係において、SD002の東縁をSE1247は切るが、井戸埋没後にSD002がまた切っている。このSE1247に切られるSD002東縁の溝覆土部分を「SD002d」とする。SD002aは、E・G区で最下層(底面上)に礫群があるが、それに混入していた遺物には中世末期の瓦質土器小壺や明代の染付(青花)皿があり(Fig.24-20,22)、16世紀頃の掘削とみられる。次いでこれに切られる002bは、上層出土ながら、肥前陶磁(朝鮮陶磁?)の碗、明代染付碗等17世紀前半の遺物があり(Fig.24-24~26)、近世初頭頃の埋没である。出土遺物からは、一時期溝が並走して合流していたことも考えられる。いずれの溝も掘り直しがあり、002aが002bを切るのは、最終段階の掘り直しの差異とも考えられ、002aの最終段階(最終掘り直し)は近世前期頃に下るかもしれない。SD002の西側延長であるSD357は、近世初頭の銅鏡片なども出土し、その掘り直し時期は近世前期には下る。一方、002cの年代は不明である。また「002d」は、SE1247は遺物があまりないが、わずかに中世前期の瓦器挽片を含むことから、それ以前に掘削された可能性がある。遺物で検証できないが、中世初頭の掘削であろうか。すなわち、SD002は、古代末ないし中世初頭(11~12世紀前半)までに掘削され、何度も掘り直しされて近世前期まで存続した、非常に長期間の溝であり、流水痕跡があることから、水路であることが推定できる。

・SD002-a G区南端土層群「土層1a」

1.10YR4-4.5/4.7(4.8) + 10YR4-5.1 + 15.1 + 15.1 + 15 F 10YR3/6-6.8(6.9)
15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
15.1 + 15.1 + 2.6 + 20.4 + 20.4 + 20.4 + 20.4 + 20.4 + 20.4 + 20.4 + 20.4 + 20.4 + 20.4
レシケ5%、しまりや1%。
21.0YR7-6.6/6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 10.5 + 7.5-10YR3/3-4.3ルート + 5.6 + 5.6
8.4 + 8.4 + 8.4 + 8.4 + 8.4 + 8.4 + 8.4 + 8.4 + 8.4 + 8.4 + 8.4 + 8.4 + 8.4
23.10YR4-3.3/3.3ルート + 10YR5(5.6) 6.6ルート + 5.6
+ 5.6 + 5.6 + 5.6 + 5.6 + 5.6 + 5.6 + 5.6 + 5.6 + 5.6 + 5.6 + 5.6 + 5.6
15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
25.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
27.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
31.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
35.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
39.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
43.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
47.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
51.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
55.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
59.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
63.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
67.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
71.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
75.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
79.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
83.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
87.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
91.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
95.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
99.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
103.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
107.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
111.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
115.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
119.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
123.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
127.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
131.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
135.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
139.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
143.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
147.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
151.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
155.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
159.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
163.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
167.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
171.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
175.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
179.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
183.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
187.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
191.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
195.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
199.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
203.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
207.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
211.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
215.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
219.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
223.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
227.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
231.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
235.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
239.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
243.10YR4-6.6ルート + 10YR8/8ルート(1.1) 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
247.10YR5-3.1 (5'-2.4) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
251.10YR4-4.7/5.5YR4-4 (5'-4) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
255.10YR4-4.7/5.5YR4-4 (5'-4) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
259.10YR4-4.7/5.5YR4-4 (5'-4) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
263.10YR4-4.7/5.5YR4-4 (5'-4) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
267.10YR4-4.7/5.5YR4-4 (5'-4) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
271.10YR4-4.7/5.5YR4-4 (5'-4) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
275.10YR4-4.7/5.5YR4-4 (5'-4) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
279.10YR4-4.7/5.5YR4-4 (5'-4) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
283.10YR4-4.7/5.5YR4-4 (5'-4) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
287.10YR4-4.7/5.5YR4-4 (5'-4) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
291.10YR4-4.7/5.5YR4-4 (5'-4) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
295.10YR4-4.7/5.5YR4-4 (5'-4) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
301.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
305.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
309.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
313.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
317.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
321.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
325.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
329.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
333.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
337.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
341.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
345.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
349.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
353.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
357.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
361.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
365.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
369.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
373.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
377.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
381.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
385.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
389.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
393.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
397.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
401.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
405.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
409.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
413.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
417.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
421.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
425.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
429.10YR4-2 (-3-2) 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1 + 15.1
+ 15.1 +

SD002は、第2面調査時に精査すると、南側の「E/G区」の底面が002a、002bとともに、もう少し下がることが分かった(Fig.18)。掘削当初は、より古い溝の痕跡とも考えた。しかし、002aは下げた部分(最下層)には砾群を敷いたような状況があり(PL.3-1~3、巻頭図

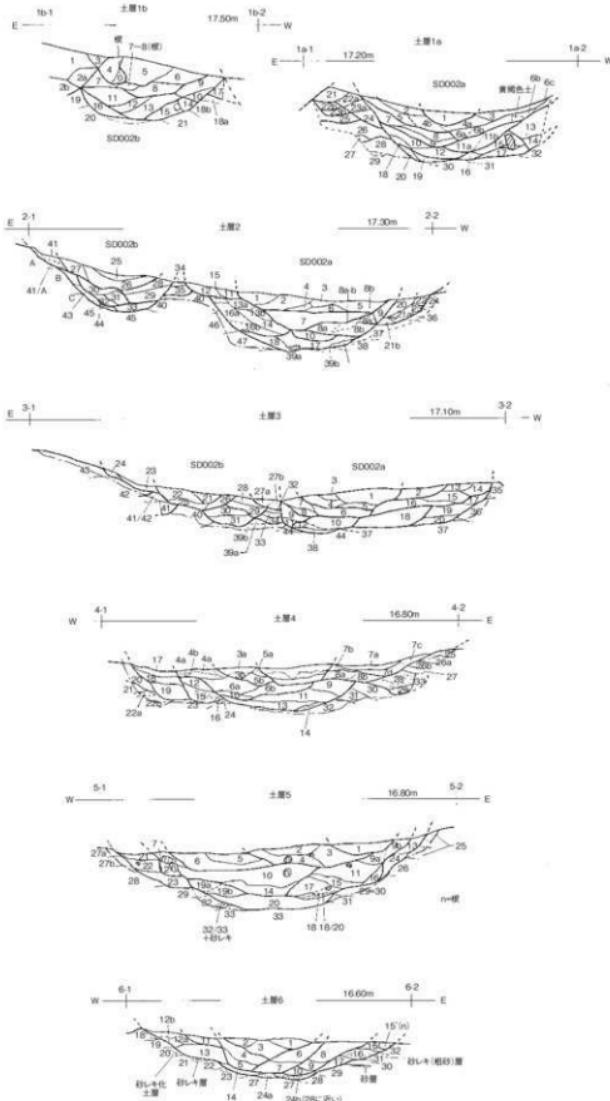
(土層1a1b,2~6#Fig.9)



SD357 (上
層 SD352)

(Fig.10、巻頭
図版1-5、PL.2-
3)

Aグリッドで検出した略東西の溝状遺構。当初、西側を「SD352」として掘削していたが、これから東に延びるSD357と同一とした。方向的には、SD002の延長になる可能性が高く、「水路」としては、底面のレベル的にも東から西へ水流するものである。SD352は、SD357の部分的な掘り返し溝であり、出土遺物からは近世前期以降に下る可能性が高い。SD352も何度か掘り返しがあり、最終段階では下部に礫が集中しており、あるいは暗渠的な遺構の痕跡の可能性もある。SD002が西へ曲がって一度調査区外へ抜け、ま



卷土重来記4·5·6

Fig.9 SD002土層断面図 (S=1/40)

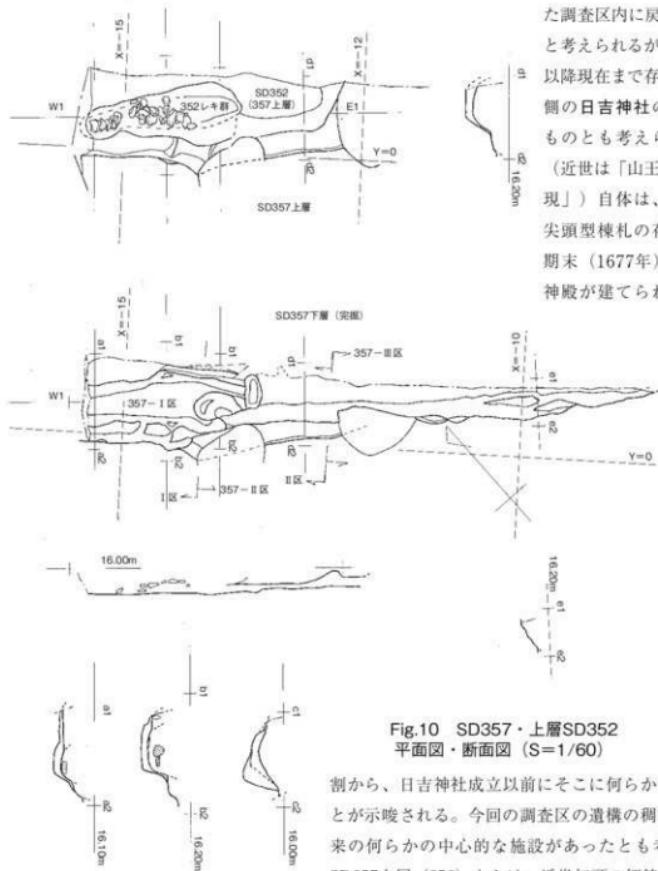


Fig.10 SD357・上層SD352
平面図・断面図 (S=1/60)

た調査区内に戻ってSD357となると考えられるが、この地割は近世以降現在まで存続する、調査区北側の日吉神社の立地を意識したものとも考えらえる。日吉神社（近世は「山王神社」「山王大権現」）自体は、「延宝五年」の尖頭型棟札の存在から、近世前期末（1677年）には少なくとも神殿が建てられているが（福岡市博物館河口綾香教示）、その由緒（建立時期）は不詳である。神社自体は近世成立と思われるが、少なくとも近世初頭に成立が遡る可能性があるSD002は、その屈曲の急激さや、溝によって画される地

割から、日吉神社成立以前にそこに何らかの施設があったことが示唆される。今回の調査区の遺構の稠密さから、古代以来の何らかの中心的な施設があったとも考えられる。なおSD357上層（352）からは、近世初頭の柄鏡の破片が出土して

いる（Fig.37、Ph.2）。その他、中世後期以降の平瓦が出土している（Fig.32-24）。

・土坑など（SK・SXほか）

SX (SK) 013 (Fig.11左上・巻頭図版3-4、裏表紙写真左上)

Cグリッドで検出した土坑。土坑上面に26×18cmの礫が廃棄され、その脇に同一個体の須恵器（Fig.21-37）が廃棄される。祭祀的な小磐座か。礫は土坑底面からは浮いている。長軸56cm×短軸42cmの楕円形、深さ（上面で遺物が出土する場合は遺物上面からを深さとする）18cm。礫は、SX602のような滑石ではないが、片岩系石材で、あるいは大型石錐未成品だった可能性もある。須恵器III期か。

SX (SK) 003 (Fig.11中上・右上・巻頭図版3-5、PL.2-6)

Aグリッド東で検出。推定118cm×88cmの不整楕円形、深さ18cm。底面は中央が凹む。須恵器を中心にして遺物が多く出土した（Fig.21-6～21）。須恵器VI期前半の遺構。

SX004 (Fig.11左中・PL.2-7)

・SD002-D区南トレンチ北側東西土層
〔土層4〕

- 17 -

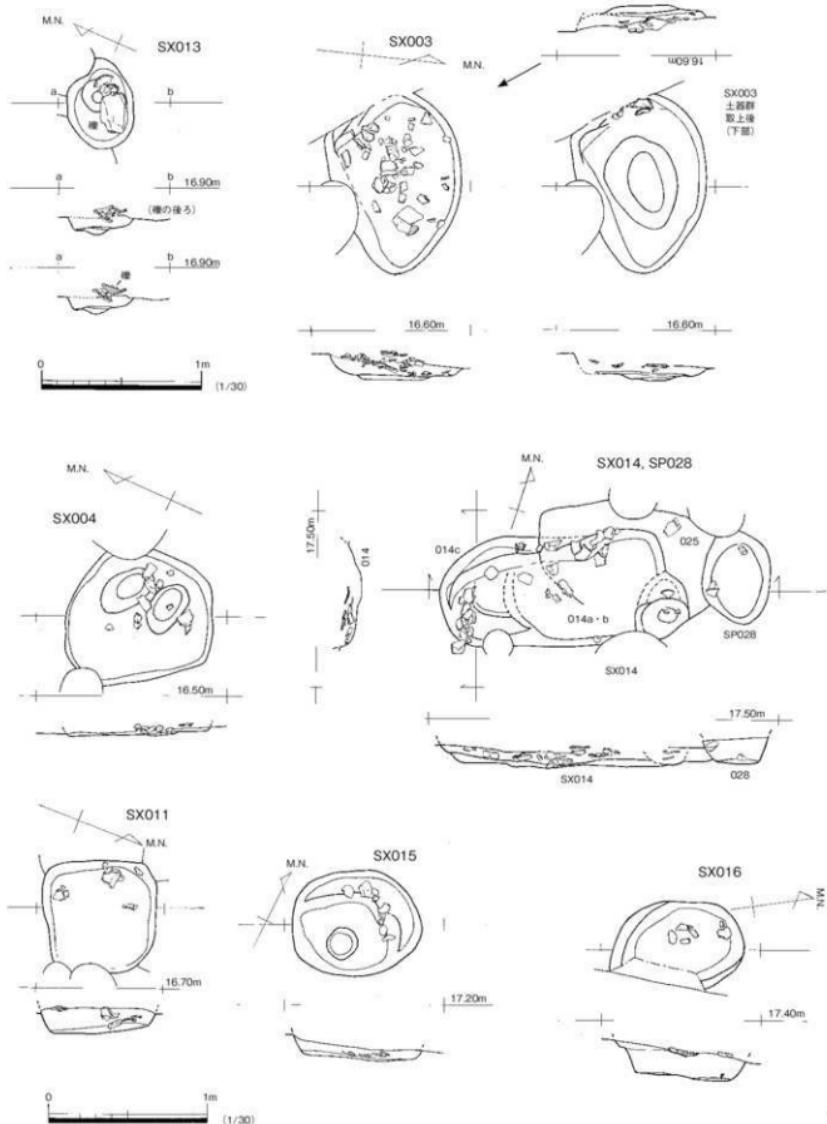


Fig.11 第1面遺構（土坑、土器溜など）実測図 I (1/30)

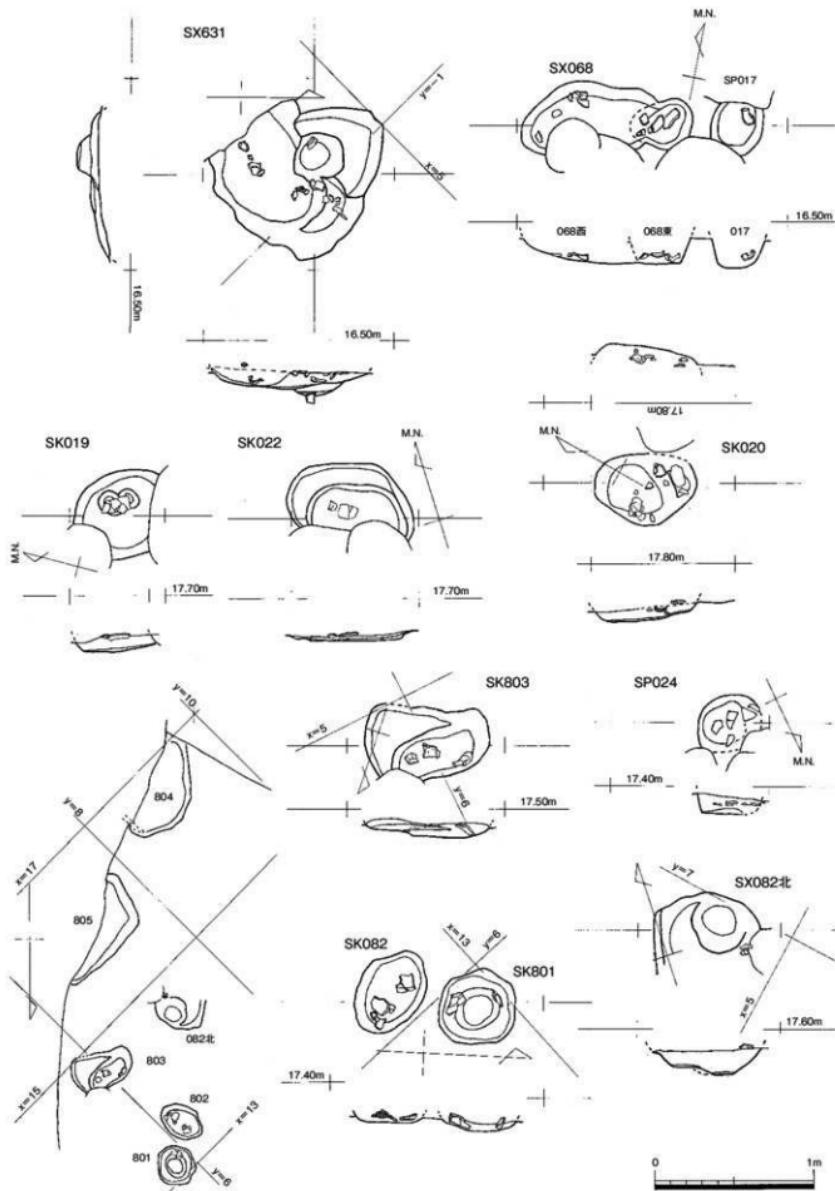


Fig.12 第1面および1面下部遺構（土坑、土器窪など）実測図Ⅱ（1/30）

Aグリッド東で検出。92cm×84cm、深さ9cm。須恵器を中心に遺物が出土した(Fig.21-22~29)。VI期前半。

SX014・SP028

(Fig.11右中、

PL.2-9~11)

Gグリッドの遺

構稠密区で検出。遺構の重複が難しいが、本来SP028も含めて一連の遺構で、布掘り柱穴列の可能性がある。SX014も西側の014cと東側の014abに分かれるが、このように考えると遺物の接合関係や特異な出土遺物などを説明できる。014cから028まで長さ210cm、014は144cm×72cm、深さ14cm。028は60cm×43cm、深さ16cm。出土遺物には須恵器、土師器(Fig.22-1~6)、韓式系土器(Fig.23-3~6.11)がある。須恵器ⅢB期の遺構。

SX(SK) 011 (Fig.11左下)

Bグリッドで検出。72cm×70cmの隅丸正方形、深さ17cm。須恵器、土師器が出土(Fig.21-30~34)。須恵器ⅢA期の遺構か。

SX(SK) 015 (Fig.11中下、PL.2-8)

Fグリッドで検出。82cm×68cmの不整円形、深さ16cm(検出面に高低差がある場合は高い方から底面の低いところを深さとする)。土師器の甕・壺を出土。古墳時代後期~飛鳥時代か。

SX(SK) 016 (Fig.11右下)

Gグリッドで検出。推定88cm×58cmの略楕円形、深さ17cm。土師器甕を出土。古墳時代後期か。

SX(SK) 631 (Fig.12左上、巻頭図版3-2)

Aグリッド東で検出。116cm×99cm以上の不整形、深さ南側14cm、北側21cm(ピット部25cm)。SK003に切られる。須恵器、土師器が出土(Fig.22-32~35)。須恵器VI期前半の遺構。

SX068・SP017 (Fig.12右上、PL.2-5中央)

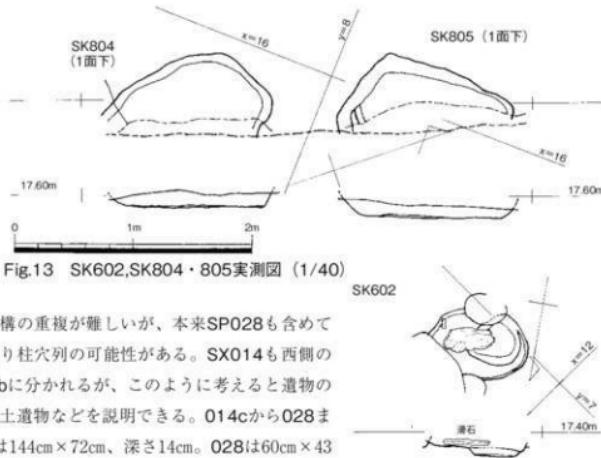
Gグリッドの遺構稠密区で検出。遺構の重複が難しいが、本来SP017も含めて一連の遺構で、布掘り柱穴列(の下部)の可能性がある。SX068の東側が切り合い不明確な柱穴状なのもこのためであろう。SX014・SP028と平行し、これを切る。対応する柱穴列は遺構が多くすぎて不明確だが、連続する掘立柱建物の建替痕跡かもしれない。068から017まで長さ155cm。068は110cm×47cm、深さ16cm。017は推定39cm×33cm、深さ19cm。出土遺物には須恵器、土師器(赤焼土器)がある(Fig.22-11~16)。須恵器IV期初頭の遺構。

SK(SP) 019 (Fig.12左中)

Gグリッドで検出。67cm×54cmの不整円形、深さ12cm。韓式系土器が出土(Fig.23-6.7)。

SK022 (Fig.12中二段目)

Gグリッドで検出。82cm×58cmの不整楕円形、深さ6cm。須恵器壺が出土し(Fig.22-10)、須恵器IV期前半。



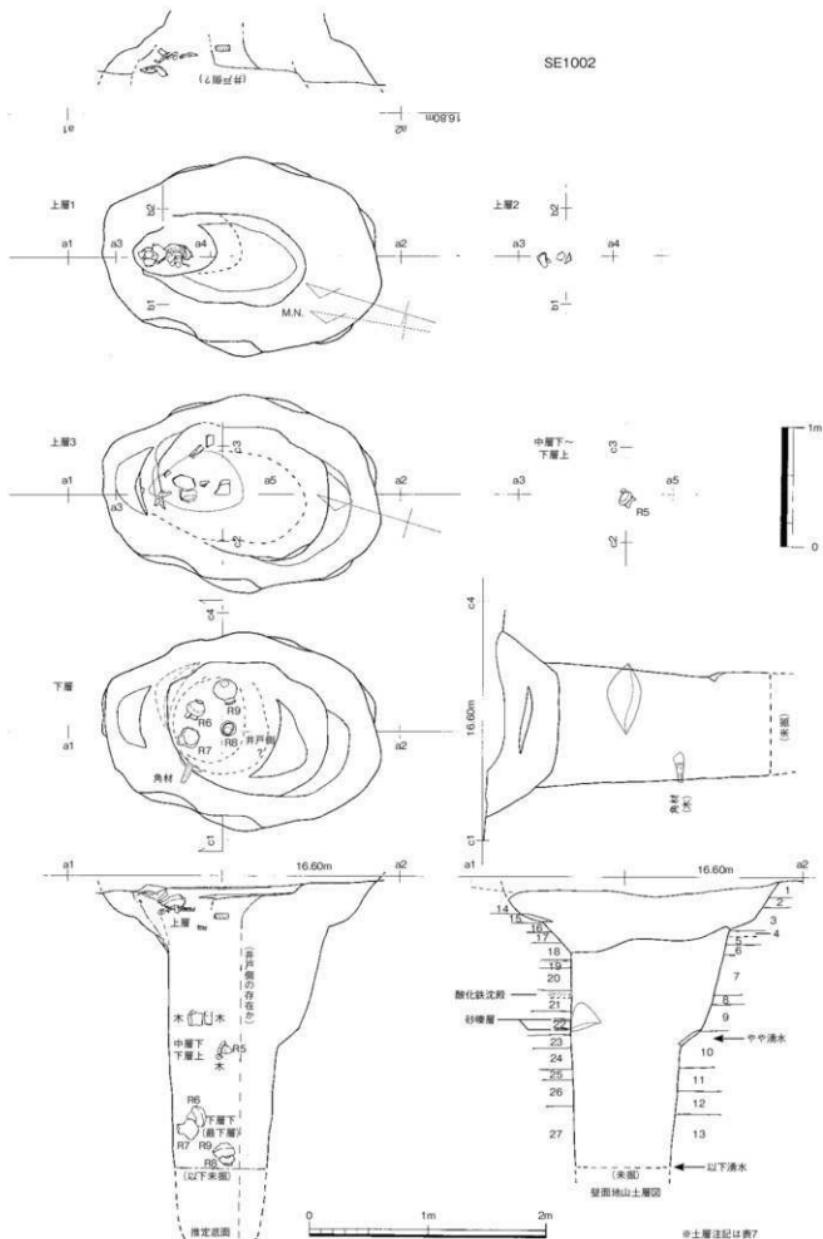


Fig.14 SE1002 実測図、壁面土層図 (1/40)

・SE1002 壁面地山土層注記 (Fig.14)

1明オリーブ灰色跡質シルト+砂利
2明灰白色砂質+小砂利
3にぶい灰白色砂質レキ層+粗砂+小砂利多い
45cmと同じが部分沈殿して明黄褐色化
5灰白色砂質+砂
6明褐色砂質+明褐色粘土+砂含む
7明褐色砂質+明褐色粘土+しまった砂利層。全体として灰土=明オリーブ灰
8明オリーブ灰色跡質シルト+砂利含む
9しまった灰土=明褐色砂質レキ層+一部明オリーブ灰色
砂質シルト含む。砂利やや細い。

10砂質+砂利したが砂利粗くなる。石英片含む。粗
砂利
11明オリーブ灰色砂質シルト+（グリ化）+砂利多く含む
70%灰土を含む（下層）+中砂石など含む
12明青色-明褐色砂質シルト+砂利約50%。砂利細い
が13層よりは大きい。澁水多くなる
13明褐色+青オリーブ灰土+砂利多く含む+石
英片岩片約4cm以上含む。澁水多く
14明褐色砂質シルト+砂利（割の透徹度7）
151層より3層よりしまりあり+砂利やや多い
16灰褐色シルト+砂利。しまりあり
17.5層と同
18明白色砂質シルト+砂利60%。しまりあり

19（明）黄褐色粘土。上層部黒くなる
20砂利と同
21明オリーブ灰色-明褐色砂質シルト層。上層部酸化鉄
22明褐色砂質
23灰色-オリーブ灰色シルト層。間に砂利層が入る
2411層と同
25明黄褐色砂質シルト+砂利層。上下より大きいレキ
は少ない
26灰色-黄褐色砂質レキ層+大レキ3cm以上含むが下より
少ない。あまり青くない層（グリ化あまりしてな
い）。澁水多くなる
2713層と同じ。澁水激しくなる

表7：SE1002壁面地山土層注記 (Fig.14)

SK020 (Fig.12右二段目、PL.2-11)

Gグリッドで検出。65cm×45cmの不整形、深さ12~14cm。須恵器壺が出土し (Fig.22-8.9) 、須恵器IV期初頭。

SP024 (Fig.12右三段目、巻頭図版3-1)

Gグリッドで検出。44cm×推定36cmの不整円形、深さ13cm。韓式系土器が出土 (Fig.23-8)。

SX (SK) 803 (Fig.12中三段目)

Gグリッド第1面下部で検出。129cm×54cmの不整形、深さ12cmの土坑。土師器壺が出土 (Fig.33-2)。古墳時代中期～後期前半の遺構か。

SK802 (Fig.12下中央、PL.3-12)

Gグリッド第1面下部で検出。58cm×41cmの不整円形、深さ8cm。土師器壺が出土 (Fig.33-1)。古墳時代後期の遺構か。

SK801 (Fig.12中央下、PL.3-12)

Gグリッド第1面下部で検出。50cm×48cmの略円形土坑、深さ11cm。

SX082 (北) (Fig.12右下)

Gグリッドで検出。SK082南半は他遺構に切られ不明確。東西50cm、南北50cm以上、深さ14cm、北東側がピット状になり20cm。韓式系土器が出土 (Fig.22-22.3)。

SK804 (Fig.13左上、PL.3-15)

Gグリッド第1面下部で検出。南北132cm以上×東西推定100cmの不整長方形土坑、深さ12cmだが、写真に見るようによくとも第1面検出レベルからの掘り込みが想定される。古墳時代後期か。

SK805 (Fig.13右上、PL.3-15)

Gグリッド第1面下部で検出。推定140cm×推定95cmの不整長方形土坑、深さ12cmだが、写真に見るようによくとも第1面検出レベルからの掘り込みが想定される。古墳時代後期か。

SK602 (Fig.13下、巻頭図版3-1、PL.2-9)

Gグリッド遺構稠密部分で検出。86×58cm、深さ16cmだが、滑石製大型石錘 (Fig.35-1) 出土レベルは上部の深さ7cmのテラス面。韓式系土器を出土したSK025に切られるが、同一遺構の可能性もあり、古墳時代後期後半だろう。

(2) 第2面および第2面下部の遺構 (Fig.6・7)

・井戸 (SE)

SE1002 (Fig.14、巻頭図版4-1、PL.4-3~11)

Cグリッドで検出した。検出時は南北240cm×東西166cmの略楕円形。掘り方上部（上層）は深さ40cm（南側）～60cm（北側）まで南北に広い楕円形で、それ以下から急に落ち込む。上面中央より北側に落ち込みの中心があり、その下部で

・SE1247外側地山土層注記

A : 10YR5-2 (6-2・6-3) 砂質シルト。しまりやや甘い-ややあり。鉄分濃縮で黄橙色のしみ
B : 7.5YR4-4/4-2灰土-灰褐色粘土質シルト。しまりやや甘い。鉄分濃縮あり黄褐色しみ
C : 5-7.5YR3-1/3-2黒褐色粘土-粘質シルト。しまりややあり-やや甘い
E : 25YR5-5YR6-1/6-2粘土。しまりあり
E : 砂利層（澁水）、レキ角柱狀・扁平状（石英および片岩）

表8: SE1247土層注記(Fig.15左下)

遺物が出土する。遺物の出土状況は、-40cmまでの土器片が連続廃棄される上層（PL4.3~8）、木片が出土する-120cmまでの中層、それ以下の完形ないし遺存率の高い土器が出土する下層（PL4.9~11）に分かれる。検出面から-240~245cmまで下げたところで、周囲地山が疊層のため、崩落の危険性を感じて掘削を断念した。しかし、ピンボールを何箇所も刺して遺存率の高い遺物はそれ以下に無いことと、推定地山底面（粘土層）の深さを確認している。掘り方壁面-120cm以下で若干の湧水がみられ、-240cmないしやや上から湧水が多くみられた。現在の森林保水力が低下した現況でその地下水レベルであるので、井戸掘削当時はより湧水が十分にあったと思われる。そのほか、西壁下層の

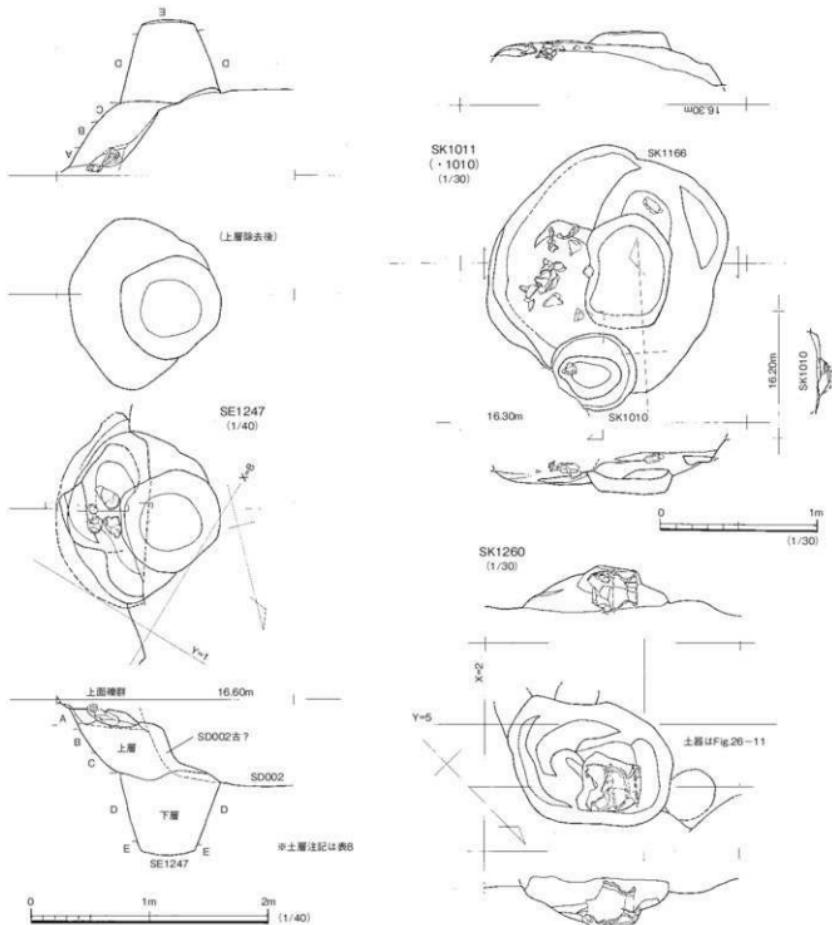


Fig.15 第2面遺構（井戸、土坑など）実測図 I (S=1/40, 1/30)

-160~170cm付近で、角材状の木杭が地山に横方向に打ち込まれていた。これは井戸掘削時の足場などの痕跡であろう。その他、中層以下の井戸壁面に木質痕跡が見られた部分もあり、かつすでに述べたように遺物出土の平面状況から、上半で径60cm、下半で径50cm程度の範囲は、何らかの「井戸側」が設けられていた可能性がある。もし井戸側（枠）があったとすれば、削り貫き井戸側を積み重ねたものであろうが、明確な痕跡は見いだせなかった。あるいは、井戸廃棄時にそれを抜き取った可能性もあるが憶測の域を出ない。しかしながら、単なる素掘り井戸としては、やや不可解な遺物出土状況ではある。遺物は、弥生時代中期末の土器が井戸下層から上層にかけて出土した（Fig.25-1~10）。厳密な「一括性」は各レベルの「廃棄単位」にあるが、土器様式的には、須玖II式新相の小様式の幅内におさまるものである。

SE1247 (Fig.15左、PL.4-12~15)

Dグリッドで検出。SD002と重複関係にあるが、SD002の項で述べたように、SD002に切られるが、SD002東縁部を切っている可能性が高い。SD002（古）→SE1247→SD002と想定できる。最終的にSD002に切られるので、上半部の西半は失われている。そのため南北160cm、東西144cmであるが、本来上面円形であろう。深さは、130cm、およそSD002底面付近から狭まる下半の径85cm部分の深さは70cmである。上面に疊の集中があるが、井戸廃棄時の投棄によるものか。掘り方は二段掘り状で、下半落ち込みは掘り方中央より西側に偏る。湧水は底面近くの地山E層で明確にあるが、SD002底面でもある地山D層でも若干湧水がある。井戸側痕跡は途中までほとんど見られなかつたが、底面付近に、わずかに井戸側材痕跡があった（PL. 4-14）。出土遺物はきわめて少ないが、わずかに中世前期の瓦器焼片があり、埋没時期を示すと考えられる。

・土坑ほか（SK・SXほか）

SK1011・SK（SP）1010 (Fig.15右上)

Bグリッド東～Dグリッド、SD002下部で検出した。SK1011は略東西163cm×略南北158cmの不整円形、深さ24cmないし中央が凹み深さ30cmとなる。SP1010は南側でこれを切るもので、54cm×49cm、深さ15cm（SP1010検出レベルから）である。1011はSD1009（後述）の延長上になるが、略円形プランが明確に認められたことから、SD1009を切っていると考えられる。出土遺物は、1011は弥生時代後期初頭の土器がある（Fig.25-11～13）。同様に1010も弥生後期初頭の壺形土器を出土している（Fig.25-14）。相次いで営まれた遺構であろう。

SK1260 (Fig.15右下、PL.3-11)

Bグリッドで検出した。108cm×80cmの不整形土坑で、深さ32cm。弥生土器の丹塗瓢形壺（Fig.26-11）が横たわった状態出土しているが、胴部中位以下は無かった。土坑の位置は、SD2002の上部に当たる位置であり、その埋没後の土坑である。出土土器から、弥生時代後期初頭である。

SK1188 (Fig.16左上)

Eグリッドで検出した。第2面遺構としているが、第1面SK150（巻頭図版3-3）の下部に当たり、同一遺構下層の可能性が高い。第2面遺構としては、145cm×112cmの隅丸不整長方形、深さ26cmである。SK1188としての遺物はほとんどないが、SK150と同一遺構とすれば、中世後期の瓦質土器などが出土し、15～16世紀であろう。

SK2011 (Fig.16上中)

Eグリッドで検出。SD002底面で検出し残りは悪い。110cm×98cmの不整方形、深さ17cm。出土遺物に乏しく、時期は不明確。

SX（SD？）1035 (Fig.16左中、PL.5-7)

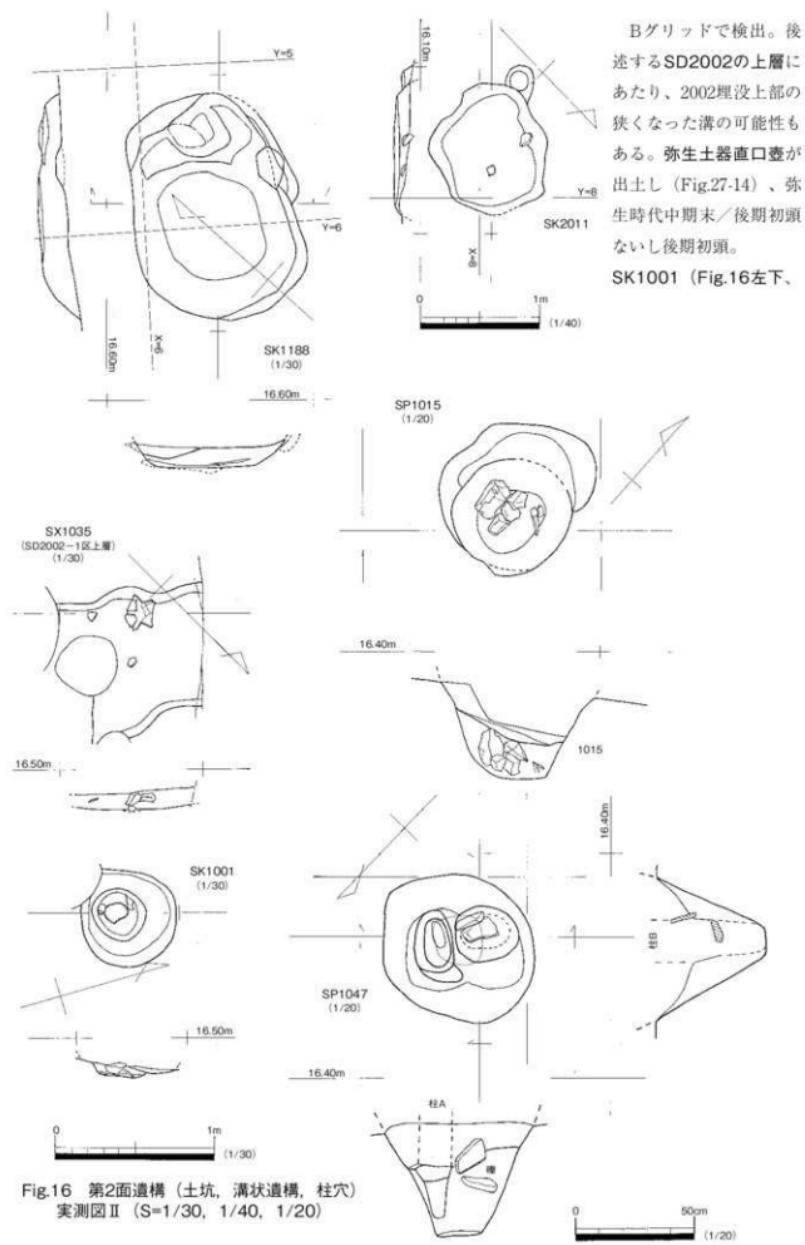


Fig.16 第2面遺構(土坑、溝状遺構、柱穴)
実測図II (S=1/30, 1/40, 1/20)

PL.3-13・5-7)

Bグリッドで検出。後述するSD2003埋没後の上部遺構。64cm×60cmの略円形、深さ12cm。弥生土器の壺底部が出土し(Fig.25-15)、弥生時代中期～後期初頭の幅内である。

・柱穴 (SP)

SP1015 (Fig.16右二段目、PL.5-4)

Bグリッドで検出した柱穴。掘り方67cm×64cm、深さ42cm。北側が二段掘りで深さ22～27cmの

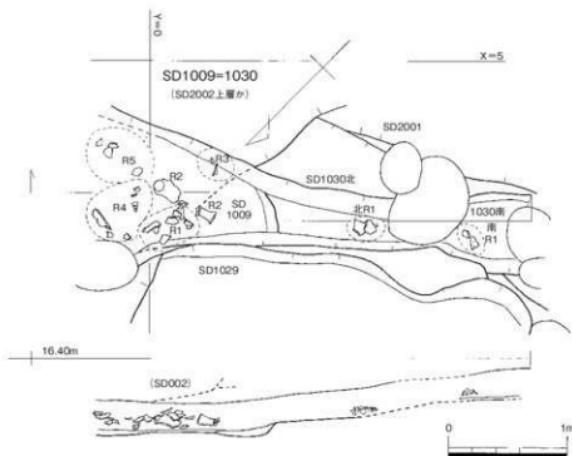


Fig.17 SD1009・1030土器出土状況 (S=1/40)

テラスを有する。柱の裏込めに礫を多用する。弥生土器が出土しているが (Fig.31-31)、裏込めの特徴からは古墳時代以降の可能性が高い。

SP1047 (Fig.16右下、PL.5-3)

Bグリッドで検出した柱穴。掘り71cm×59cm、深さ47cm。柱痕跡が新旧2回ある。裏込めに扁平な礫を使用する部分がある。おそらく古墳時代以降であろう。

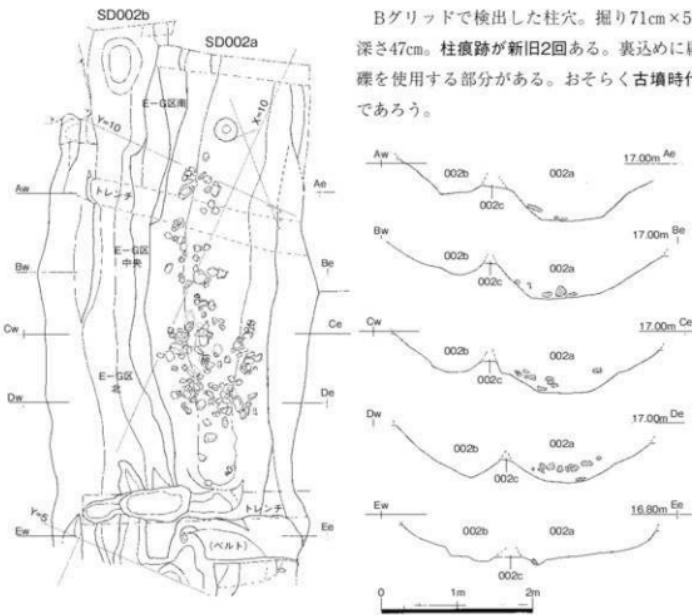


Fig.18 SD002a下層礫群出土状況、SD002-E-G区完掘状況実測図 (S=1/62.5)

・掘立柱建物（SB）

挿図の順序と前後するが、先に掘立柱建物について記述する。本調査では、柱穴が第1面、第2面とともに無数に検出されたので、多数の掘立柱建物が存在したはずであるが、逆にピットの検出が多すぎるので、有意な柱穴の組み合わせを復元するのが困難であった。以下の2棟は、現場でも可能性を考えたものから拾い上げたものである。弥生時代も、明確な堅穴住居は無いことからすれば、平地住居などの掘立柱建物主体だった可能性がある。いずれも第2面検出の柱穴であるが、弥生時代の溝状遺構との関係からは古墳時代後期ないし飛鳥時代に下がる可能性があり、本来は第1面で柱穴が検出された可能性があるものである。ただし、第1面下部包含層の一部（Aグリッド東・Bグリッドの一部）で、赤褐色気味の整地層（飛鳥時代初頭頃？）がみられたが、これよりは下位とすれば、古墳時代後期の蓋然性が高い。

SB01（Fig.19上、PL.5-2）

Bグリッド～Aグリッド東で検出した。屈曲する柱穴列ないし対向する柱穴列が不明なので、厳密には掘立柱建物か不明だが、掘立柱建物としておく。4分間の柱穴列である。長さ8.32m。南側のSP1017から東側に柱穴列が屈曲すると思われるが、SD002により不明になっている。SP1047（前述）は2つの柱痕跡を有する。柱の裏込めに扁平疊を使うことなど、古墳時代以降の可能性が高い。

SB02（Fig.19下）

Bグリッド～Aグリッド東で検出した。南北5間、東西3間の掘立柱建物で、9.6m×4.96m。やや大型の掘立柱建物である。建物西辺は3次調査区になり、相当する平面位置の柱穴があるが、「レベル」の問題（前述）が不明瞭で確定しない。SP1015（前述）に弥生時代中期末の土器があるが、裏込めに疊を多用するなど弥生時代建物には少ない特徴があり、弥生時代溝状遺構との関係からも、土器は混入であろう。古墳時代以降と考える。

・溝状遺構（水路等）および自然流路（SD）

SD1009・1030（Fig.17、PL.5-6,8,9）

SD2002の上層ないし上部遺構。SD2001との切り合い関係は微妙である。N-50°-E。南西側は幅70cm、北東側で幅156cmに広がる。底面は、北東側が35cm低くなる。弥生時代中期後半～末（一部後期初頭）の土器群が出土している（Fig.26-5・27-7～15）。おおむね弥生中期末である。

SD1029（Fig.6・17）

SD1009・1030を切ると見た溝状遺構。N-45°-E。SD2002・2003埋没後の上部遺構。南西側で幅80cm、北東側で幅160cmに広がり、底面は北東が低い。出土遺物（Fig.27-4～6）からも弥生時代後期初頭か。

SD2001・2002・2003（Fig.7、土層断面図Fig.20）

一連の溝（水路）・自然流路で、まずSD2003の自然流路が幅5m近くで存在し、その埋没過程で人為的掘り返しや自然の再流路化が何度かあったと考えられる。一定程度埋没したところで、2003の中央から南側にかけてSD2002が水路として掘削され、これも埋没したところでさらにSD2001がさらに水路として掘削されたものと観察した（今回はこれら溝の全体土層であるFig.20上段・巻頭図版4-6の土層注記は紙幅上割愛した）。これらの水路・流路は、埋没後（古墳時代以降が主体か？）に多くの土坑やピット（柱穴以外に自然の生痕なども含む可能性がある）が上部に営まれたが、第2面検出時も全体に黒褐色～極暗褐色気味の範囲としてとらえられた（巻頭図版3-8、Fig.6のアミカケ部分）。さらに第1面下部に赤褐色気味シルトを多く含む「整地層」（古墳時代後期末～飛鳥時代初頭？）がみられたのも多くはこの上部範囲である。流路・水路の変遷を見ると、2003が弥生時代中期

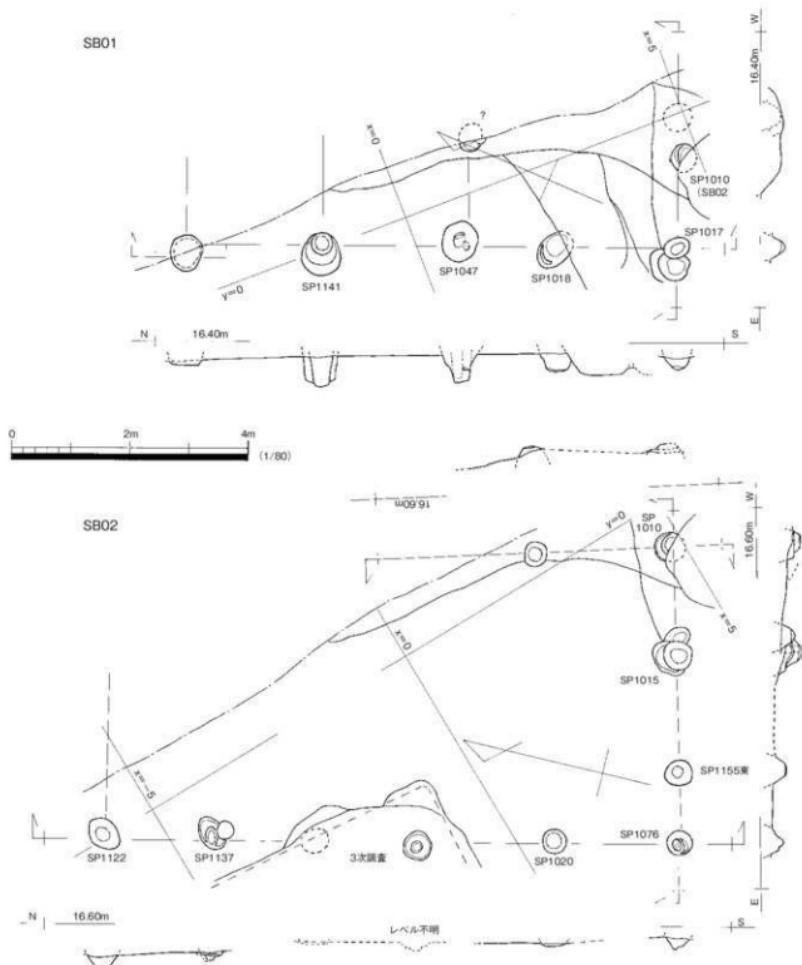


Fig.19 第2面SB01, SB02 実測図 (S=1/80)

後半（須玖Ⅱ式古相）までは存在し、中期末（須玖Ⅱ式新相）に埋没し、2002の掘削と埋没も中期末の時間幅、2001の掘削は中期末の中で、その水路としての利用は中期末／後期初頭の過渡期様式まで、その時間幅内で埋没し、上部に中期末／後期初頭や後期初頭の浅い小溝（水路？）や土坑が複数営まれたことが、出土した一括廃棄土器群の変遷からうかがえる。また、本来の流路は東から西へ流れるものだったと考えられるが、SD2003（SD2002もその可能性）は調査範囲の中央を起点（底面最高点）として、東西に流水させるものに変化していた可能性がある。

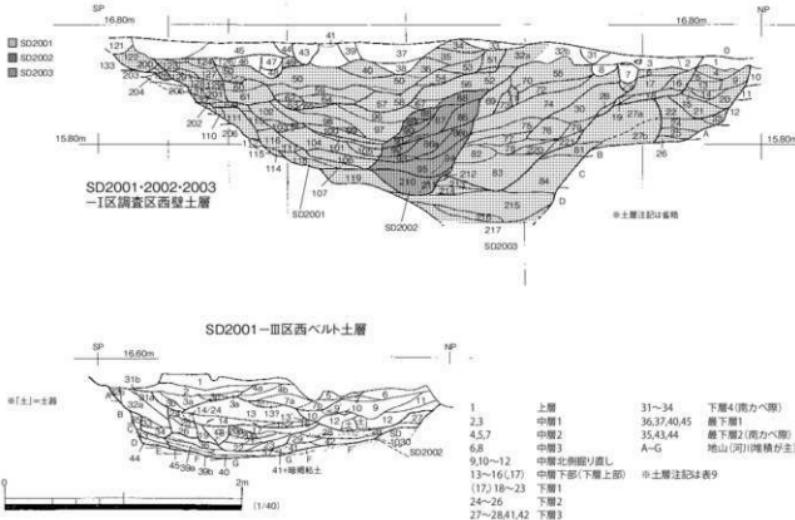


Fig.20 SD2001・2002・2003 土層図 ($S=1/40$)

SD2001 (Fig.7、土層断面図Fig.20、巻頭図版4・3~10、PL.5-10,11,13・6-1~9,11,14)

SD2003・2002の埋没後には、SD2003のおよそ南半分の幅で掘削された溝。幅2.0m~3.7m（幅が2m未満となる東側はSD002下部の検出のため）。堆積は、砂層・砂疊層もあるが、暗褐色～黒褐色のシルト層が多く、土層観察すると（Fig.20下段）、何度か掘り返しをしつつ、流水はあるが同時に「よどみ」状になっていた時間が長かった可能性が高い。断面は逆台形である。深さは、西側の調査区壁面で検出面-100cm、標高15.60m、中央のⅢ区西ベルトで検出面-70cm、標高15.90m、さらに東側は再び底面のレベルが下がって行き、V区東端では標高15.65mの底面の落ち込みがある。すなわち、このSD2001は東西方向双方に水流させている特異な水路となる。これは、SD2001の底面レベル自体も、最も高いⅢ区西側付近（Fig.20下段土層部分付近）でも湧水があることもあるが、どこから「水」を給水させていた可能性がある。2001-I区の落ち込みでは自然に湧水していた可能性があるが、それと共に、ちょうど底面レベル最高箇所が、井戸SE1002の長輪方向上ということに注目される。これは同時期遺構（弥生時代中期末）でもあり看過できない。当時の地表面レベルは調査では失われているが、湧水が多かったと想定される井戸SE2001から、導水溝がSD2001に取り付いていたのではないかろうか？導水溝自体は失われて（削平されて）いるが、そのような井戸（湧水の多い井戸から水路に導水するもの）としては、春日市赤手遺跡の「井戸跡」などがある（春日市文化財調査報告書第6集）。このような想定が許されるなら、井戸における土器の廃棄祭祀と、SD2001における水路祭祀は、「水の祭祀」という点で相互に連関していたとみてもあながち間違いではないだろう。出土遺物には、弥生時代中期末から、中期末／後期初頭の過渡期様式（柳田康雄1986「後期1式古」）の多数の土器群がある（Fig.27-17~23、Fig.28・29、Fig.30-1~16.18~23、Fig.31-1~5）。多数の土器廃棄があり、何度も「水の祭祀」が行われたことが判明する。中には、縦位の櫛描波状文を丹塗器短頸壺に施す特異な土器もある（Fig.34-1）。また各廃棄単位は「一括性」が高い。最も新しいのは一部に

・SD2001-Ⅲ区西ベルト土層

- 11.0YR4/2-26(灰褐色) (標準と同様色10YR3/2) シルト+10YR5/2-26(黄褐色) シルト+砂利(少) 7%、しまりありかたい。
- 2.10YR6/2-26(小) 小石<10mm以下、砂利+粘土、しまりあり、砂利によく詰まっている。
- 3.10YR5/2-26(2) (標準と同様色10YR5/2) シルト+10YR6/2 砂+砂利10%、しまりありかたい。
- 3.砂利層とじ(灰質) シルト+砂利。しまりあり。
- 4.砂利層より下位層 砂利が多い、シルトなし砂利層、しまりありかたい。
- 5.10YR5/2 (5/2) シルト+砂+砂利40%、しまりあり。ややかたい。
- 6.10YR5/2-26(シルト) シルト+砂+砂利40%、しまりあり。
- 7.a.10YR6/3-26(2) シルト+砂+砂利20% (6/2)、しまりあり。
- 7.b.10YR6/3-26(2) シルト+砂+砂利20% (6/2)、しまりあり。
- 8.10YR5/2-26(2) 粘土+砂利20% (5%)、しまりややかたい。
- 9.10YR5/2-26(2) シルト+砂+砂利20% (5%)、しまりややかたい。
- 10.10YR5/2-26(2) 粘土+砂利20% (5%)、しまりややかたい。
- 11.10YR5/2-26(2) 粘土+砂利20% (5%)、しまりややかたい。
- 12.2層を含む層 (生れ(中間層)~中期末初期初期切替段差)。
- 9層より前のシルト層、10YR4/2-26(シルト+砂利10%、砂+砂利20%+少々粘土)、しまりややかとい。
- 13.10YR5/2-26(砂+粘土+砂利+少々砂)、しまりややかとい。
- 13.砂利層
13. 10YR5/2-26(砂+粘土)、しまりややかとい。
- 14.10YR4/2-4/38(砂+砂利+少々砂)、13層より明るい。土
- 茎片ややあり、しまりややかとい。
- 15.10YR4/2-26(シルト) +細白色粘土+砂利2% (シルト+砂利40%+少々砂)、しまりややかとい。
- 16.5.ルート+砂+砂利層、10YR3/2-4/38(シルト+砂利10%+少々砂)、しまりややかとい。
- 17.10YR4/2-4/38(シルト+砂利20%+少々砂) +砂利20%+砂利30%、しまりややかとい。
- 18.10YR5/2ルート+10YR5/2-5/38(40%+砂利+砂+砂利10%、しまりややかとい)。
- 19.10YR3/5-2/2ルート+砂+砂利5%+10YR5/2-5/38 10%、しまりややかとい。
- 20.a. 5.上層部 10YR3/2シルト+上10YR5/38(2-26%+砂利20%+砂利20%+少々砂)、しまりややかとい。
- 21.10YR5/38ルート+10YR5/2-26-26P、しまり甘い。
- 22.10YR4/2-4/38(砂利+砂+10YR5/2-5/38) 粘土+砂利+粘土(-黒褐色) シルト3%+砂利20%+10YR5/2-5/38(10%+砂利+砂)、しまりややかとい。
- 23.2層を含むルート+10YR2/2(黒褐色) シルト10%、しまりややかとい(一部ややかとい)、上部に成岩砂+粘土に入る。
- 24.10YR4/2-4/38(シルト+砂利40%、しまりややかとい) 25.10YR4/2-5/2-5/38(砂利40%、24層より明るい)、しまりややかとい。
- 26.10YR3/2-4/2(2) 細(一層) 黑褐色粘土+砂利2%+土層、しまりあり 地面直面層。
- 27.10YR5/2-26(2灰褐色) シルト+砂利3%、12層より明るい、しまりあり。
- 28.10YR4/2-4/2(2) 細(一層) 黑褐色砂利+砂利3%、間に砂+砂利10%+少々砂、しまりややかとい。
- 29.10YR4/2-4/1(2) シルト+砂+砂利3%未満、しまりややかとい。
- 30.灰層
- 31.10YR4/3-3/シルト+砂利5%、しまりややかとい。
- 31.21ルート+20mmとそこ、30mmの断面か。
- 32.10YR4/2-26(シルト層)、10YR5/2-26(シルト+砂利2%、しまりややかとい)。
- 32b.2層+地山粘土層+シルト層、しまり甘い。
- 33.10YR4/2-5/2(2-5+砂利+砂) 33層、しまりややかとい。
- 34.33層より明るい、10YR4/2-4/2(2) 粘土+砂利2%+砂利3%、しまりややかとい。
- 35.地山粘土層+地山A小ブロックわざか+粗粒混入、しまりややかとい。
- 36.10YR5/2-5/38(砂+粘土+下層に10YR3/2の黒褐色粘土+砂利10%+10YR3/2-5%)、しまり甘い。
- 37.37.40層毎層不明確、10YR5/2-2/2-26P、砂+、しまり甘い、間口39層、40層下部(底面)は暗褐色(-黒褐色) 粘土混入。
- 38.灰層
- 39.10YR6/3-2/7/3/6P、粗砂、36層より明るい、しまり甘い。
- 39.10YR4/3-5/2(2) 粘土、36層より明るい、しまり甘い。
- 40.33層下部
- 41.42層の砂利層+細黑褐色(-黒褐色) シルトブロック 10%+砂利6%含む。
- 42.10YR5/2-26P、砂利層、しまりややかとい、28層のしゆ多く含む。
- A.地山、10YR4/2-2/2(粘土層)
- B.地山、10YR4/2(粘土)
- C.10YR5/2-2/2(28層シルト+砂利20%)
- D.10YR5/2-2/2(粘土)、E層から10YR5/2-1(2-2) 粘土に変
- 層
- E.10YR5/2-2/2(7) 粘土+砂利10%、しまりややかとい。
- F. 10YR5/2-2/2-2/2(暗褐色粘土) 黄褐色粘土。
- G. 灰層(-黒褐色) 粘土。

表9: SD2001-Ⅲ区西ベルト土層注記 (Fig.20T)

後期初頭も含まれるがそれは埋没時期を示し、「中期末／後期初頭」までは水路が機能した時期幅の一端を示すと考えられる。なおSD1038は埋没後的小溝である (PL5-12)。

SD2002 (Fig.7、土層断面図Fig.20、巻頭図版4-10.11、PL.6-10)

流路SD2003埋没後に掘削されたと観察された水路である。南側は新しいSD2001にはば重複すると考えた場合、本来の幅(ただし検出面での)は狭いところで3.2m、広いところで4.8mである。ただし調査区東壁面およびI区平面の観察の解釈によっては、SD2001の中央部分までの幅であった可能性もあり、その場合は推定幅2.4m~3.0m前後となる。SD2003と同様、北半分の砂礫層主体部分および底面の多くについては全掘していない。しかしながら、深さは東側で-130cm(標高15.40m)、中央IIトレンチ付近で-80cm、標高15.70m付近であり、SD2001より深い。一部シルト質堆積でよどみ状となつた時期があるようであり、SD1009=1030およびSD1029埋没後的小溝である。SD2002からもやや多くの土器群が出土している (Fig.24-35、Fig.31.7~16)。いずれも、ほぼ弥生時代中期におさまる。

SD2003 (Fig.7、土層断面図Fig.20、巻頭図版4-6.10.11、PL.6-12~14)

SD2001~2003で最も古い溝状遺構。溝状とするが、堆積層の多くは砂層、砂礫層、砾層で、自然流路の可能性が高い。ただしシルト層の部分もあり、部分的には人為的に掘り返している可能性もある(本報告では土層断面図Fig.20上の注記を省略した)。すなわち、のちに水路SD2001が掘削される部分まで含めた幅4.5~5.5m前後の部分が元々の流路であった可能性がある。深さは、完掘しておらず底が不明だが、130cm以上である。本来自然流路であろうことは、堆積層の特徴だけでなく、出土遺物が少ないとからも言える。SD2003は、3次調査の水路SD15に連続する。出土遺物は、SD2002出土と接合するが、元来は2003存続時に存在していたと考えられるものとして、弥生時代前期土器 (Fig.24-37、Fig.31.18) がある。あるいは流路としての上限はそこに設定できる。ただし少数だが須玖I式以降の破片や、朝鮮半島系三角形粘土帶土器 (Fig.31.19) の型式を考えると、須玖II式前半(弥生時代中期後半)に下限を求める方が良いと思われる。

4. 出土遺物

(1) 土器・陶磁器 (Fig.21~34、Ph.1)

紙幅もなく詳細な説明記述ができないため、挿図中に基本的な遺物の種類（一部器種分類）や調整技法、時期などを、下記の＜凡例＞のように略号などで注記している。出土遺構・層位なども挿図中に示している。また「検出遺構」での記述の中で、すでに触れている場合がある。

＜凡例＞ (Fig.21~34)

「弥」=弥生土器・弥生時代、「土師」=土師器、「須」=須恵器、「皿」=皿・小皿、「ヘラ」=底部ヘラ切り、「糸」=底部糸切り、「板」=底部板目圧痕、「白」=白磁、「青」=青磁、「同」=同安窯系青磁、「龍」=龍泉窯系青磁、「青白」=青白磁、「高青」=高麗青磁、「中國」=中国陶器、「磁」=磁器、「染」=染付、「瓦」=瓦器、「東須」=東播系須恵器、「瓦質」=中世以降の瓦質土器、「高麗」=高麗陶器（無釉陶器）、「国陶」=国産陶器、「肥前」=近世肥前系陶磁器、「古」=古墳時代、「古中」=古墳中期（布留式新相併行～須恵器TK47併行）、「古後」=古墳後期（MT15併行～TK43併行=III期）、「飛」=飛鳥時代（須恵器IV期～VI期）、「飛前」=飛鳥前半期（IV期）、「飛初」=飛鳥初頭（IV期前半）、「飛中」=飛鳥中期（IV期新相～V期）、「飛後」=飛鳥後期（V～VI期）、「奈」=奈良時代、「弥初」=弥生時代前期初頭（板付I式・夜臼II式）、「弥前」=弥生時代前期、「弥中」=弥生中期、「弥後」=弥生後期、「中前」=中期前半、「中中」=中期中頃、「中後」=中期後半、「中末」=「中期末」、「中末／後初」=中期末～後期初頭の過渡期様式、「後初」=後期初頭、「後前」=後期前半、「後中」=後期中頃、「後後」=後期後半、「环（身・蓋）H・G・B」=奈良国立文化財研究所による須恵器环（杯）分類、「赤焼」=赤焼土器（タキ・当具痕、ロクロ調整など須恵器的な調整・成形技法を有するが土師器の焼成=赤焼の土器類）、「袋口壺」=（弥生土器）袋口縁壺、「錐先」=（弥生土器）錐先口縁、「跳ね上げ」=（弥生土器）跳ね上げ口縁、「双孔広壺」=双孔広口壺、「広壺」=「広口壺」、「小壺」=小型壺、「ひさご」=瓢形（壺）、「内湾く字」=内湾「く」字口縁、「丹塗」=丹塗赤彩（土器）、「權」=權衡具、「半島系」=朝鮮半島系、「韓式系」=韓半島（朝鮮半島）系古墳時代併行軟質土器、「古初」=古墳時代初頭、「B系」=B系統・伝統的V様式系（久住1999b）、「小台」=小型器台、「畿内系暗文」=畿内系暗文土器（飛鳥～奈良時代）、「焼」=焼成なお、各時代土器・陶磁器の分類と編年、年代観は下記文献を参照した。

＜古代後半期～中世＞

太宰府市教育委員会編2000「太宰府条坊跡X V～陶磁器分類編一」太宰府市の文化財第49集

中世土器研究会編1995「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社

山本信夫1990「統計上の土器―歴史時代土師器の編年研究によせて―」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集

＜古墳時代後期・飛鳥時代・古代前期＝奈良時代の土器＞

久住猛雄1999「出土須恵器の編年E2・3号墳の築造・追葬の年代について」『羽根戸南古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第661集

重藤輝行2002「筑前・筑後」『古墳時代中・後期の土師器—その編年と地域性—』第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料

長 直信2009「九州島における7世紀の須恵器」『終末期古墳の再検討』第12回九州前方後円墳研究会発表資料集

寺井 誠2018「6～7世紀の北部九州の土器に見られる新羅・加耶の要素」「海峡を通じた文化交流」九州考古学会・嶺南考古学会第13回合同考古学大会

中島 圭2010「須恵器系土師器の研究—いわゆる赤焼土器の再検討—」「還暦・還暦？、還暦！」武末純一先生還暦記念献呈文集・研究集

舟山良一2008「(2) 編年案」『牛頭窯跡群 総括報告書 I』大野城市教育委員会（須恵器「牛頭編年」）

＜弥生時代中期～後期、古式土師器＞

久住猛雄1999「庄内式併行期における北部九州の土器様相」『庄内式土器研究』IX、庄内式土器研究会

久住猛雄2008「九州 I 付編 弥生時代中期中頃～終末期古相までの井戸一括基準資料」『井戸再考』第57回埋蔵文化財研究集会資料集

田崎博之1985「須玖式土器の再検討」「史淵」第122輯、九州大学文学部

柳田康雄1986「高三瀬式と西新町式土器」「弥生文化の研究」4、「弥生土器II」、雄山閣

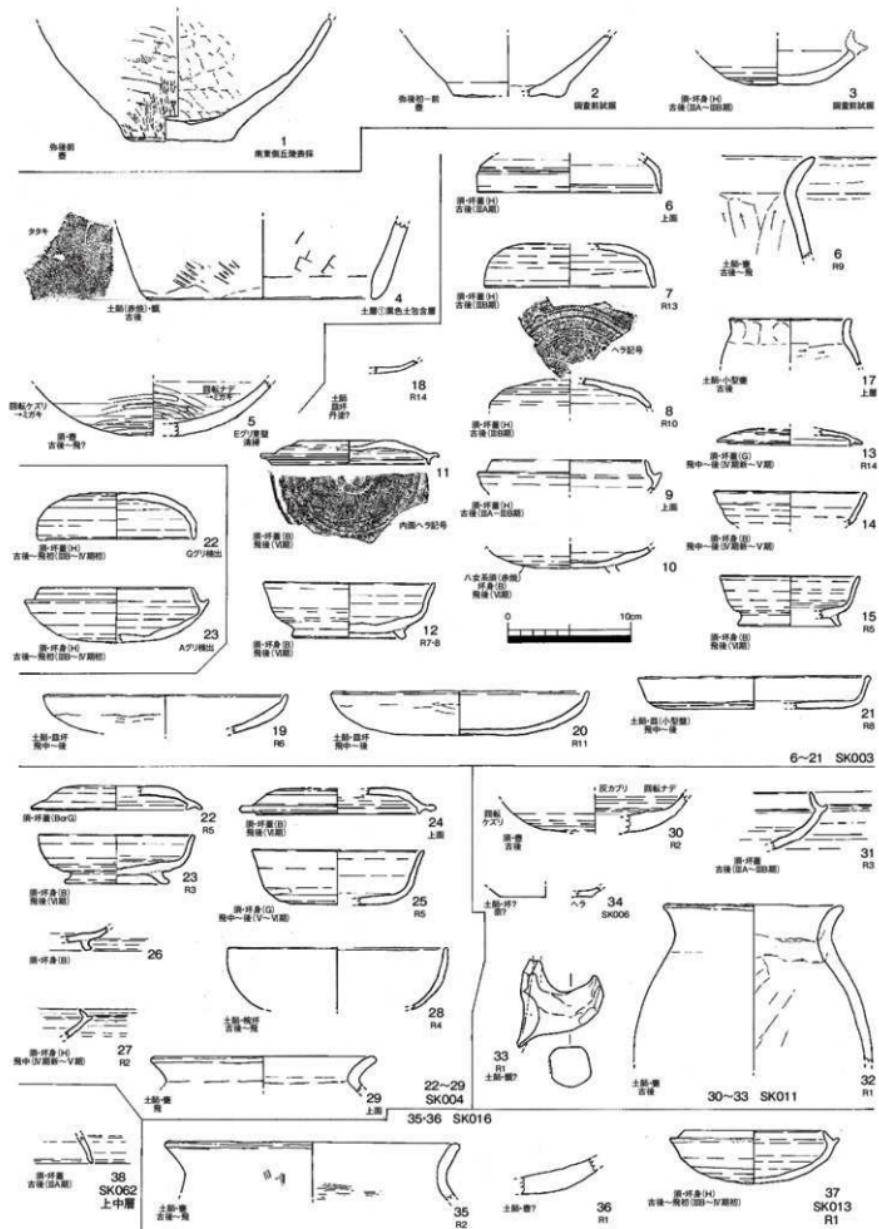


Fig.21 立花寺11次調査、試掘トレンチ、包含層、1面造構（1）出土土器（S=1/4）



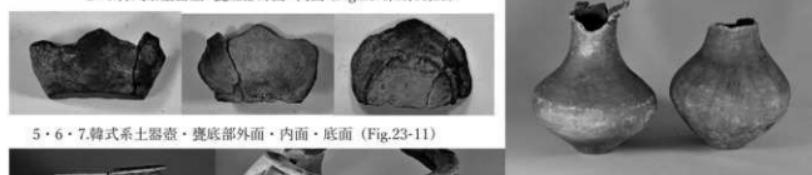
1.韓式系土器口縁部外面 (Fig.23-21,9,7,10,16)

2.韓式系土器口縁部内面 (Fig.23-21,9,7,10,16)



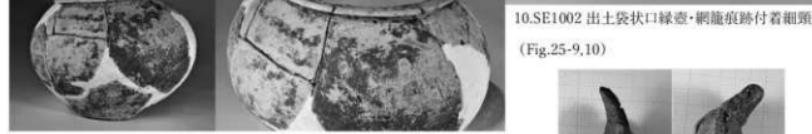
3・4.韓式系土器壺・甕底部外面・内面 (Fig.23-8,18,15,23)

8・9.韓式系土器甕頸部外面・内面 (Fig.23-6)



5・6・7.韓式系土器壺・甕底部外面・内面・底面 (Fig.23-11)

10.SE1002 出土袋状口縁壺・網籠痕跡付着細頭壺 (Fig.25-9,10)



11・12.SD1030・SD2001 出土綴位櫛描波状文丹塗無頭壺・同紋様拡大写真 (Fig.26-5,27-7,30-10,34-1)

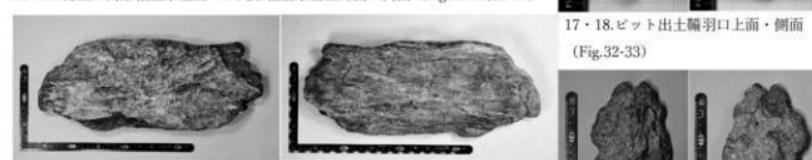


15・16.薄型三角形粘土帶土器・三角形粘土帶土器断面 (Fig.24-28,31-19)

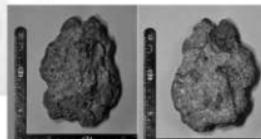


13・14.薄型三角形粘土帶土器・三角形粘土帶土器外面・内面 (Fig.24-28,31-19)

17・18.ピット出土鰐羽口上面・側面 (Fig.32-33)



19・20.SX602 出土滑石製大型石錘表裏面 (Fig.35-1)



Ph.1 立花寺11次出土遺物写真

21・22.SD2001-I / II区ベルト上層出土滑石製石錘表裏面 (図無)

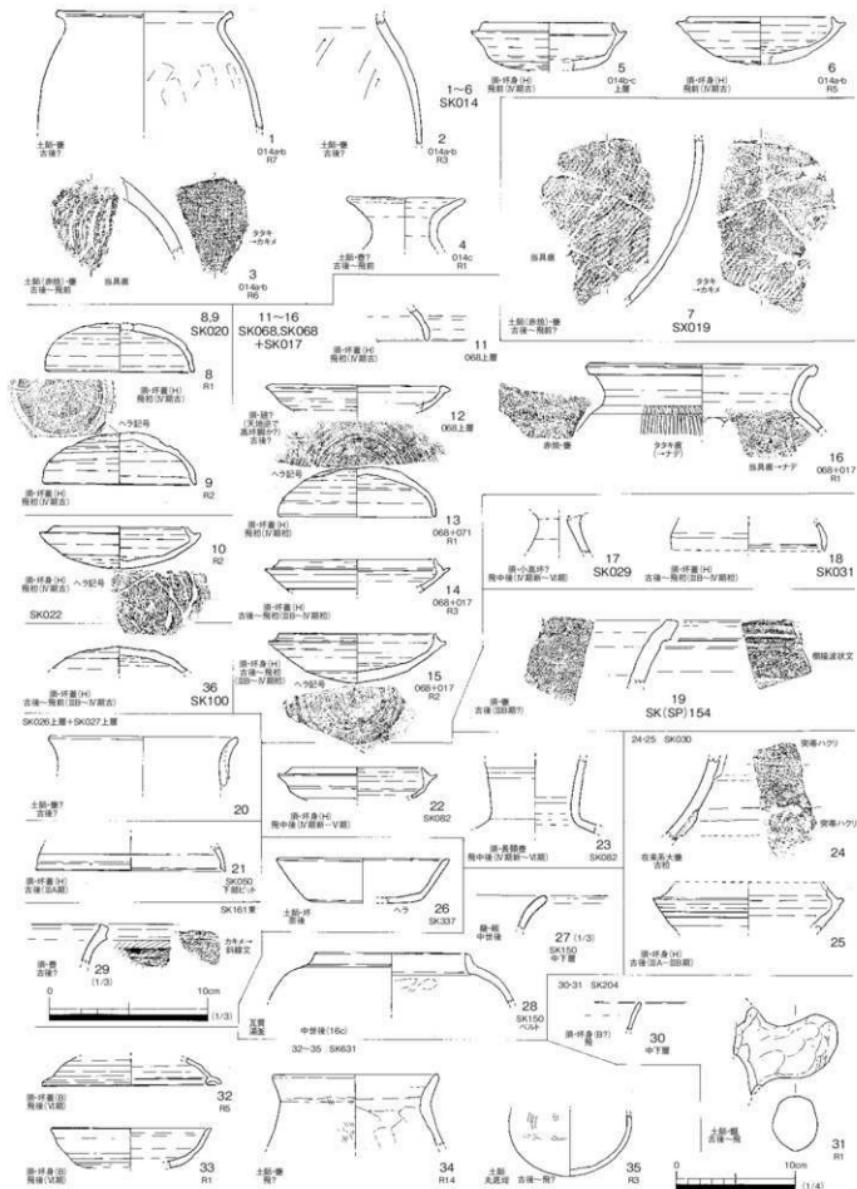


Fig.22 1面遺構出土土器 II (S=1/4, 一部S=1/3)

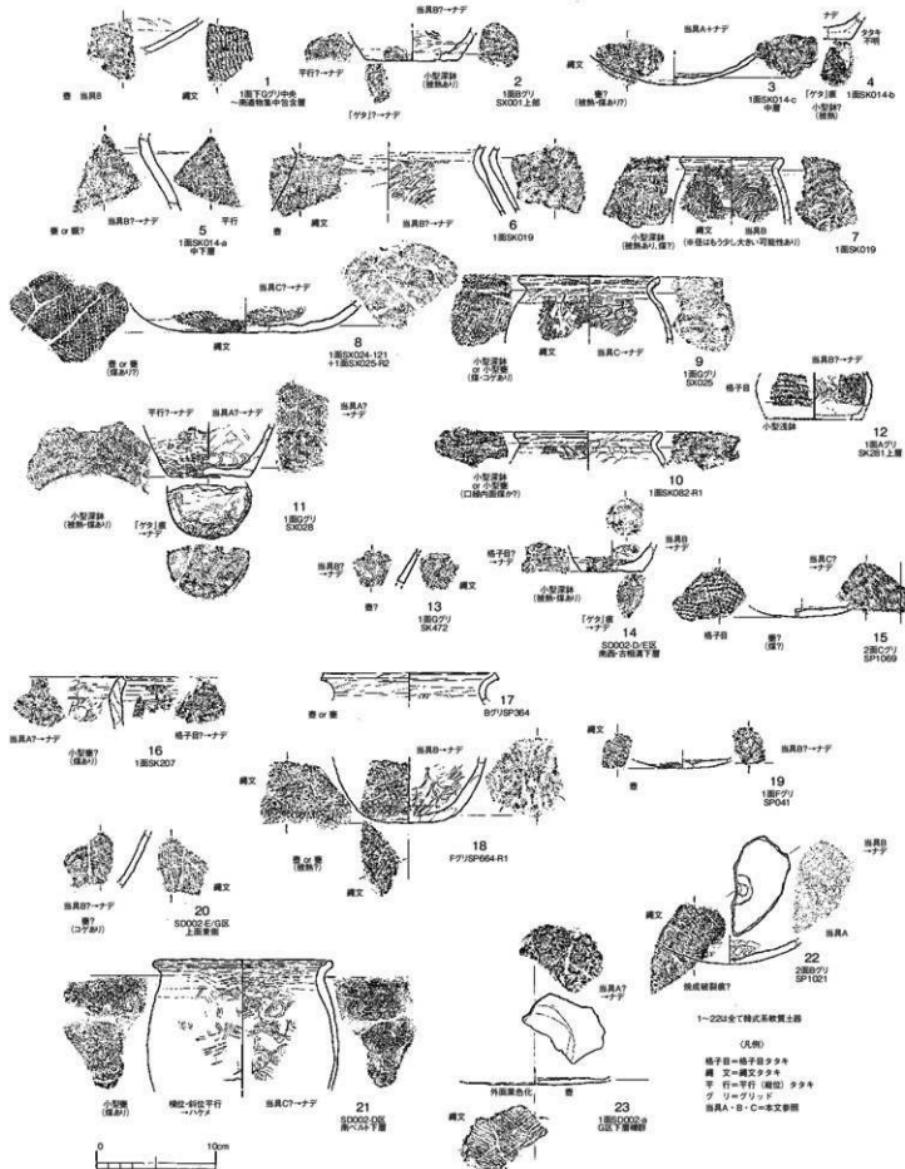


Fig.23 1面遺構（一部2面遺構）出土土器Ⅲ（韓式系土器）（S=1/4）

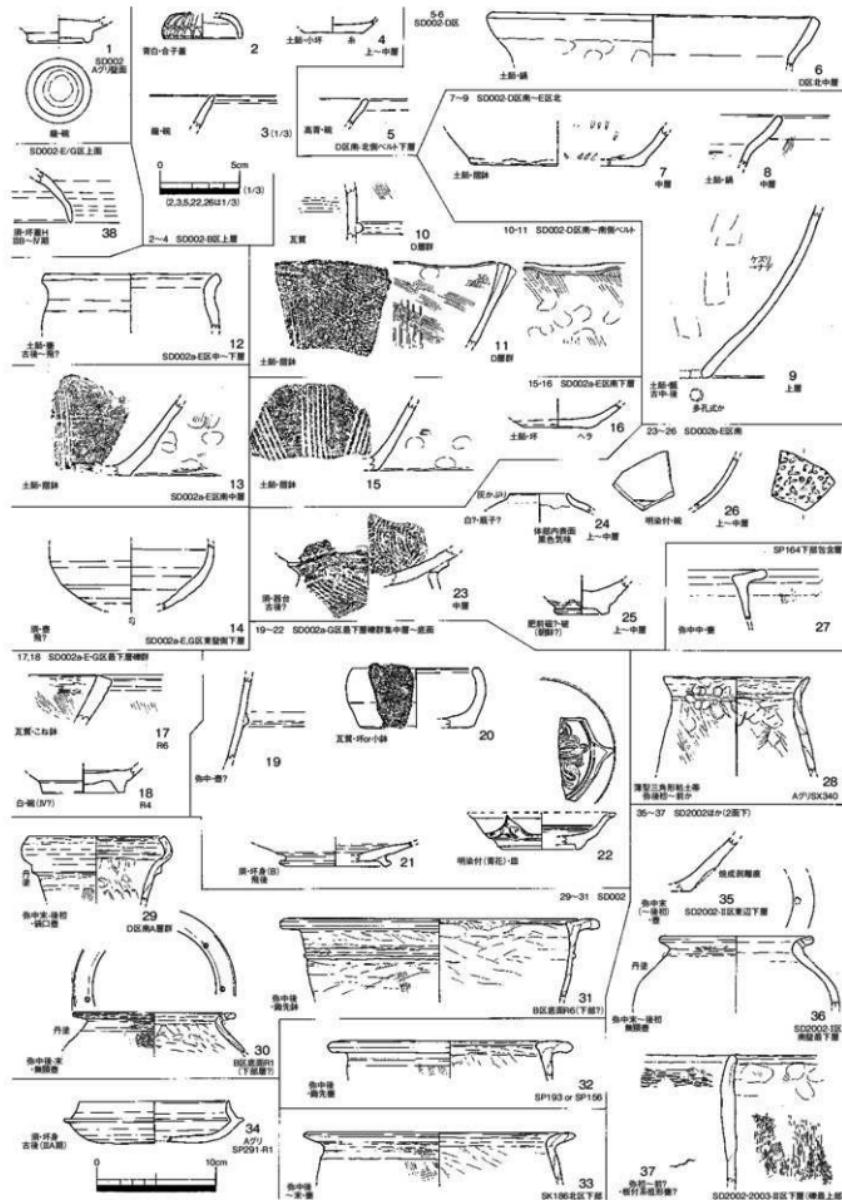


Fig.24 1面遺構出土器IV, 2面遺構 (SD2002) 出土器 (S=1/4, 一部1/3)

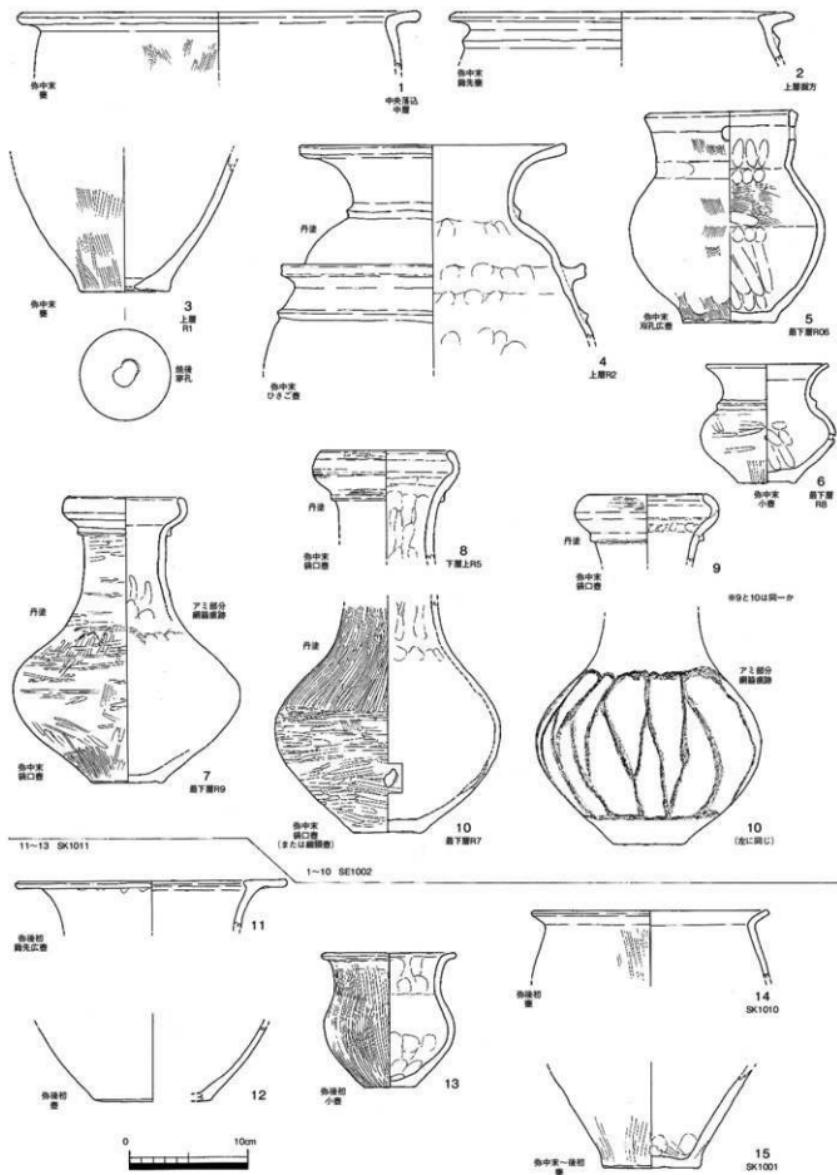


Fig.25 2面出土土器 I (1/4) (SE1002, SK1011ほか)

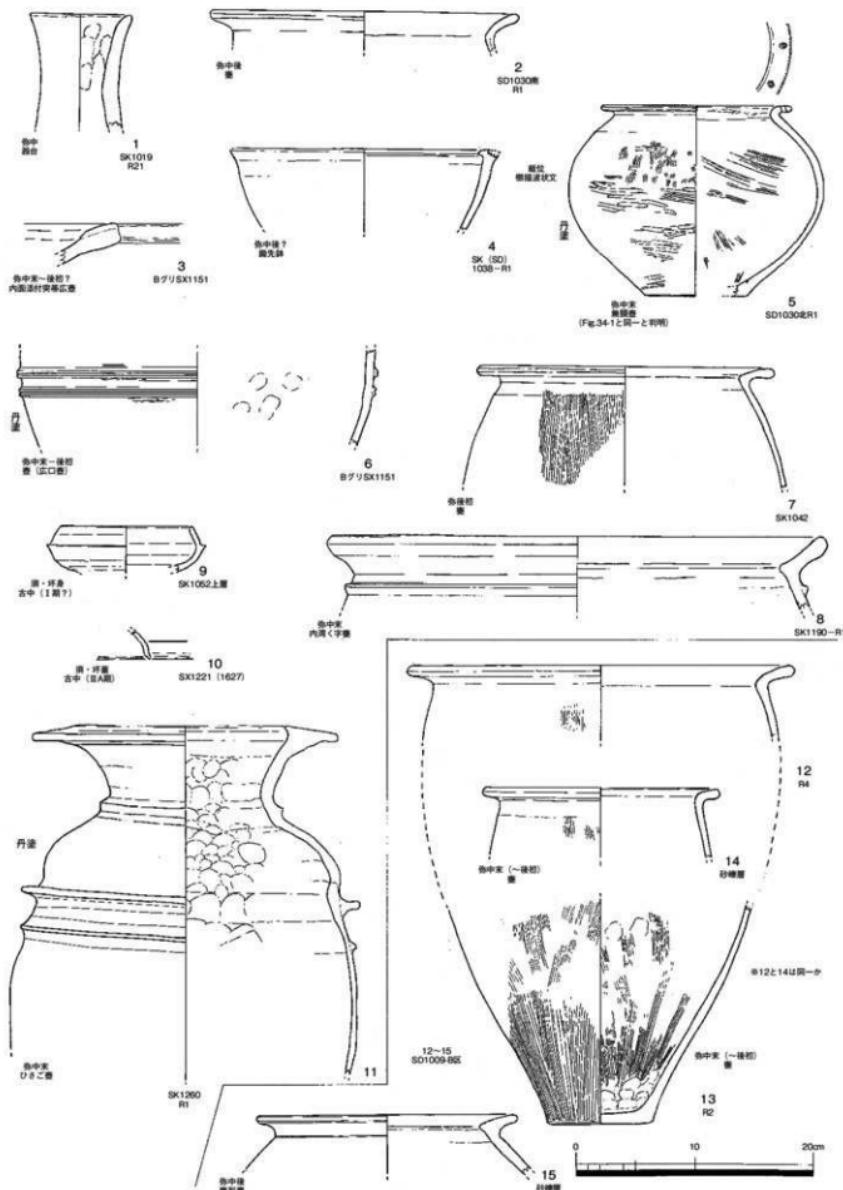


Fig.26 2面出土土器実測図Ⅱ(SD1030,SK1190,SK1260,SD1009(1)ほか)(1/4)

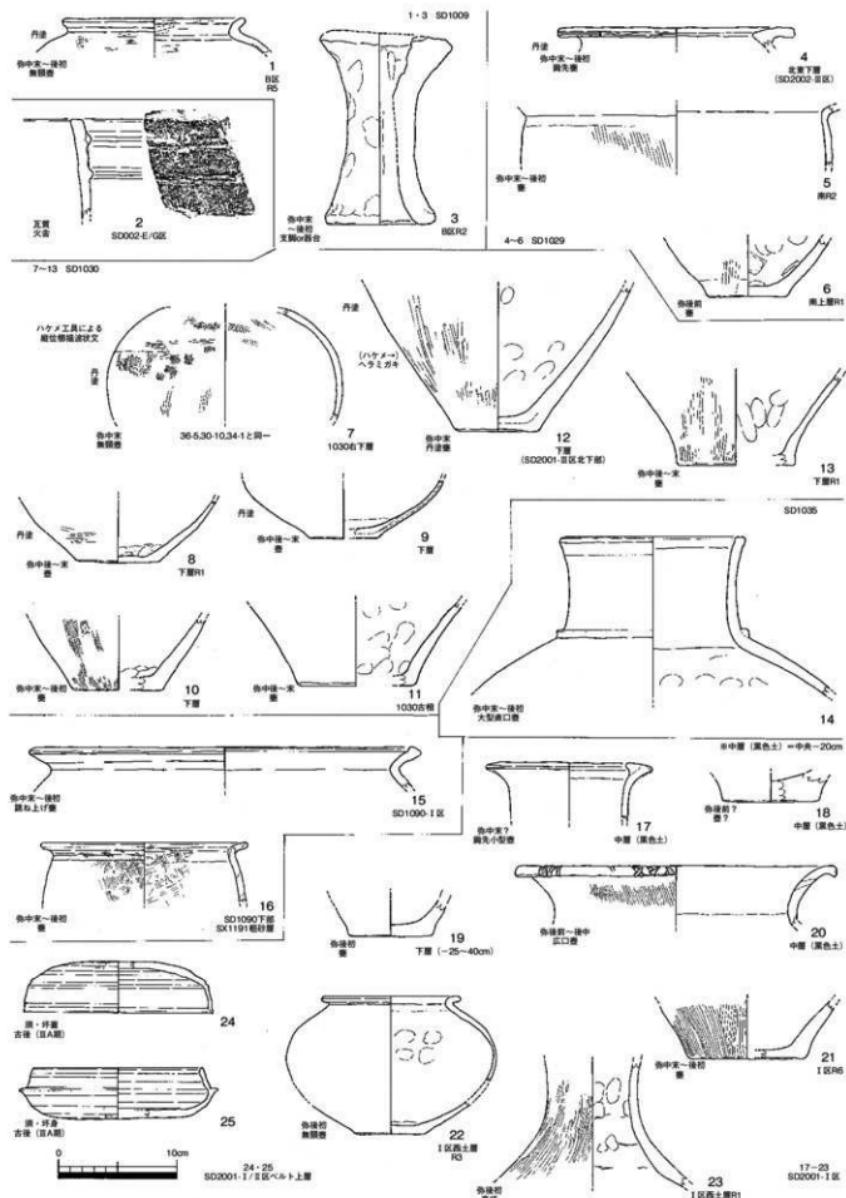


Fig.27 2面出土器実測図III(SD1009(2),SD1029,SD1030,SD1035,SD1070,SD2001(1))(1/4)

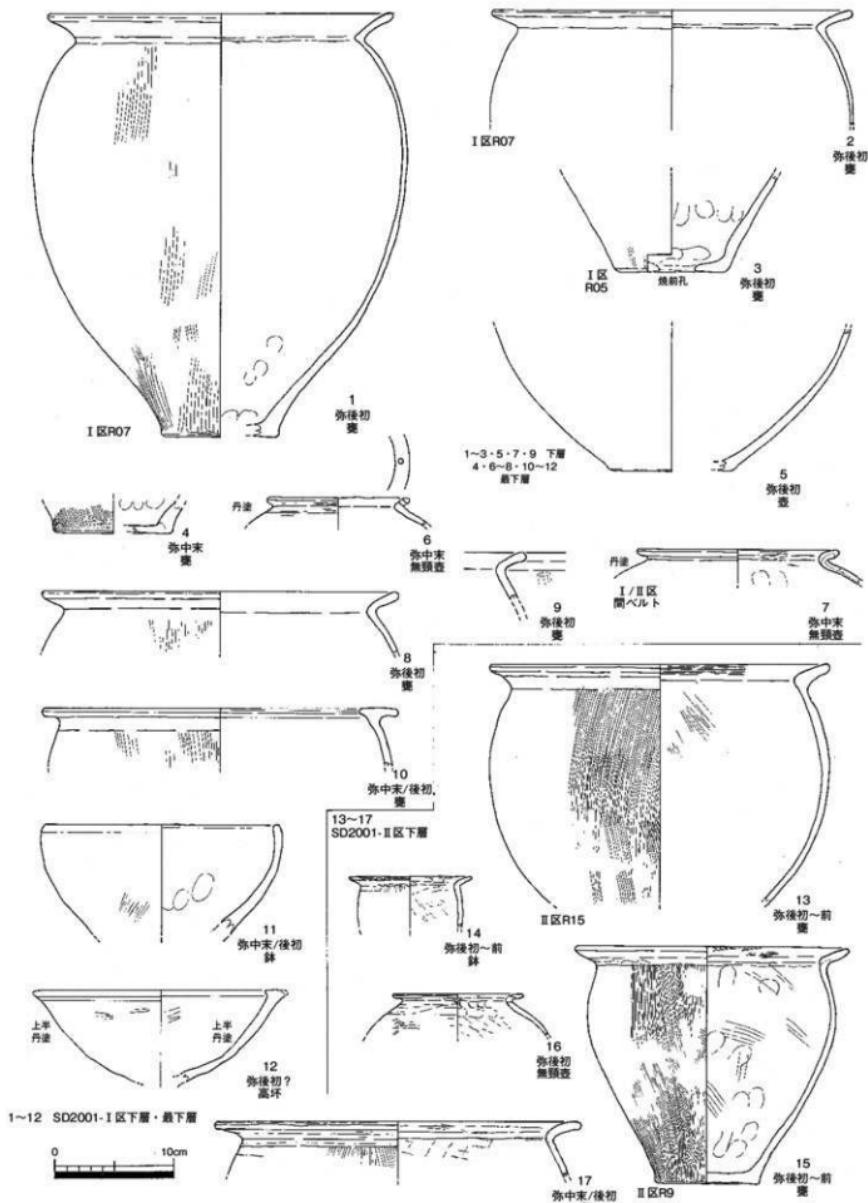


Fig.28 2面出土土器実測図IV (1/4) (SD2001(2))

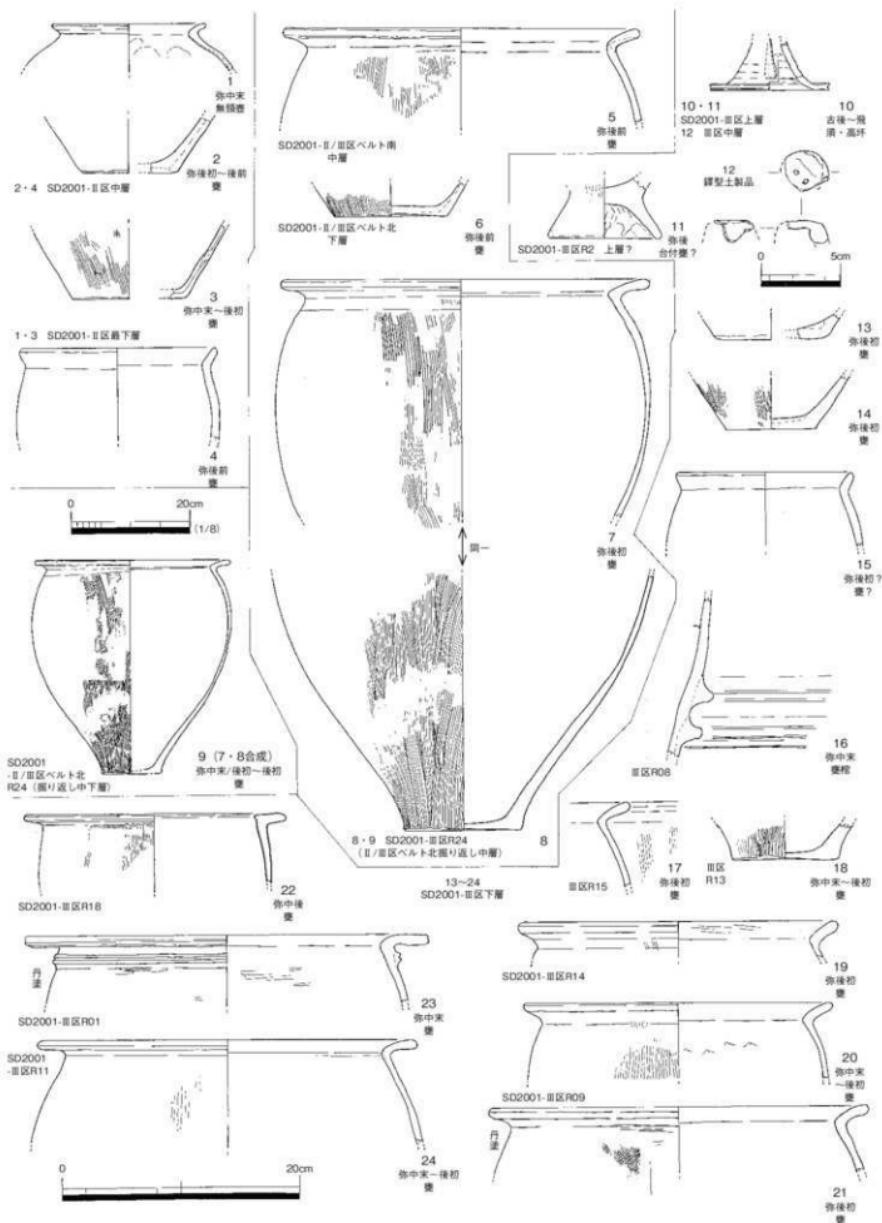


Fig.29 2面出土土器実測図V (SD2001(3)) (1/4, 一部1/3)

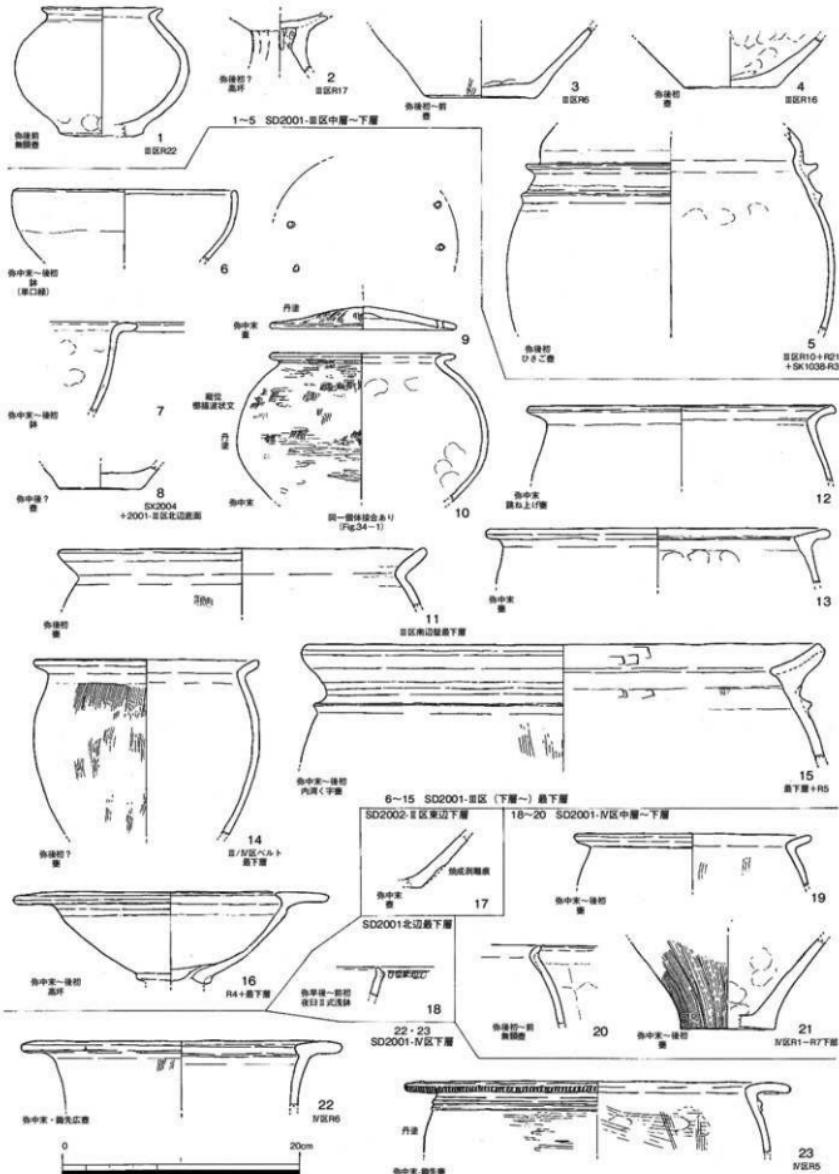


Fig.30 2面出土土器実測図VI (SD2001(4)) (1/4)

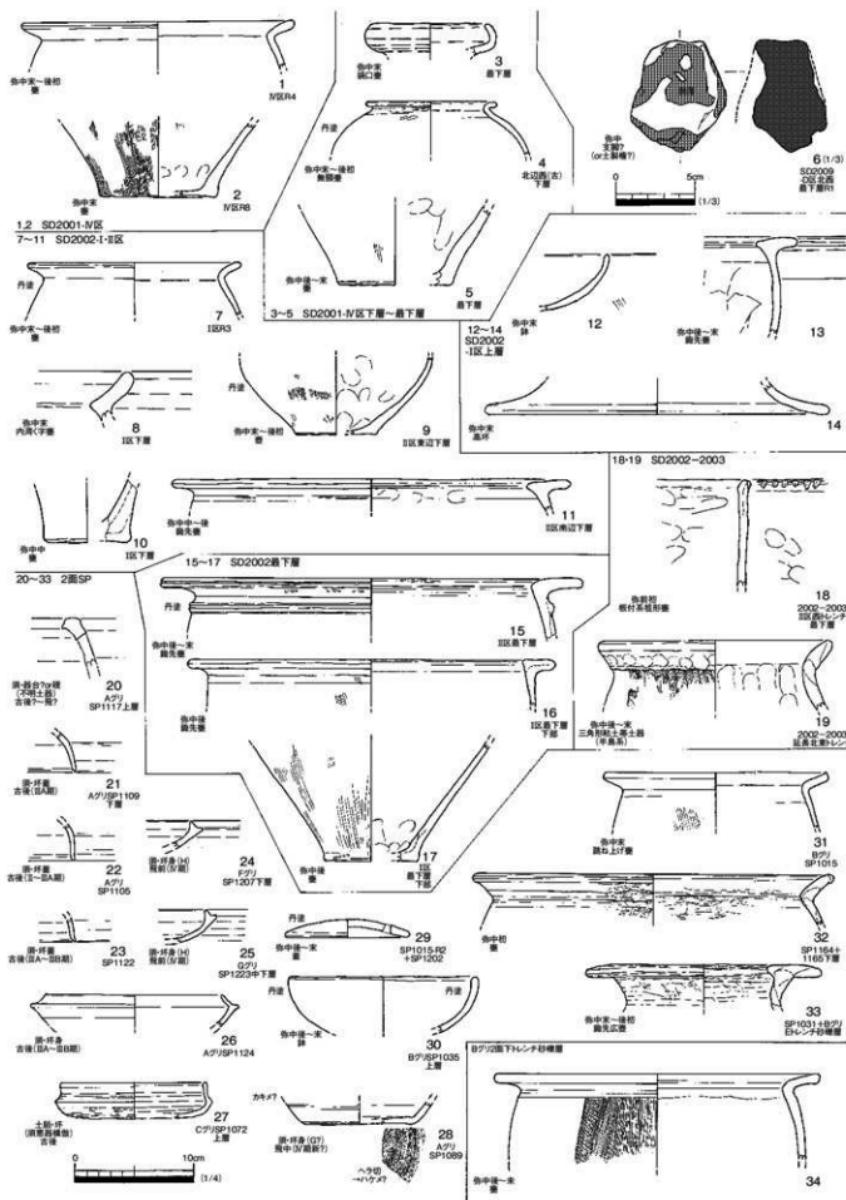


Fig.31 2面出土器実測図VI(SD2001(5), SD2002, SD2003ほか, SP, トレンチ)(1/4,一部1/3)

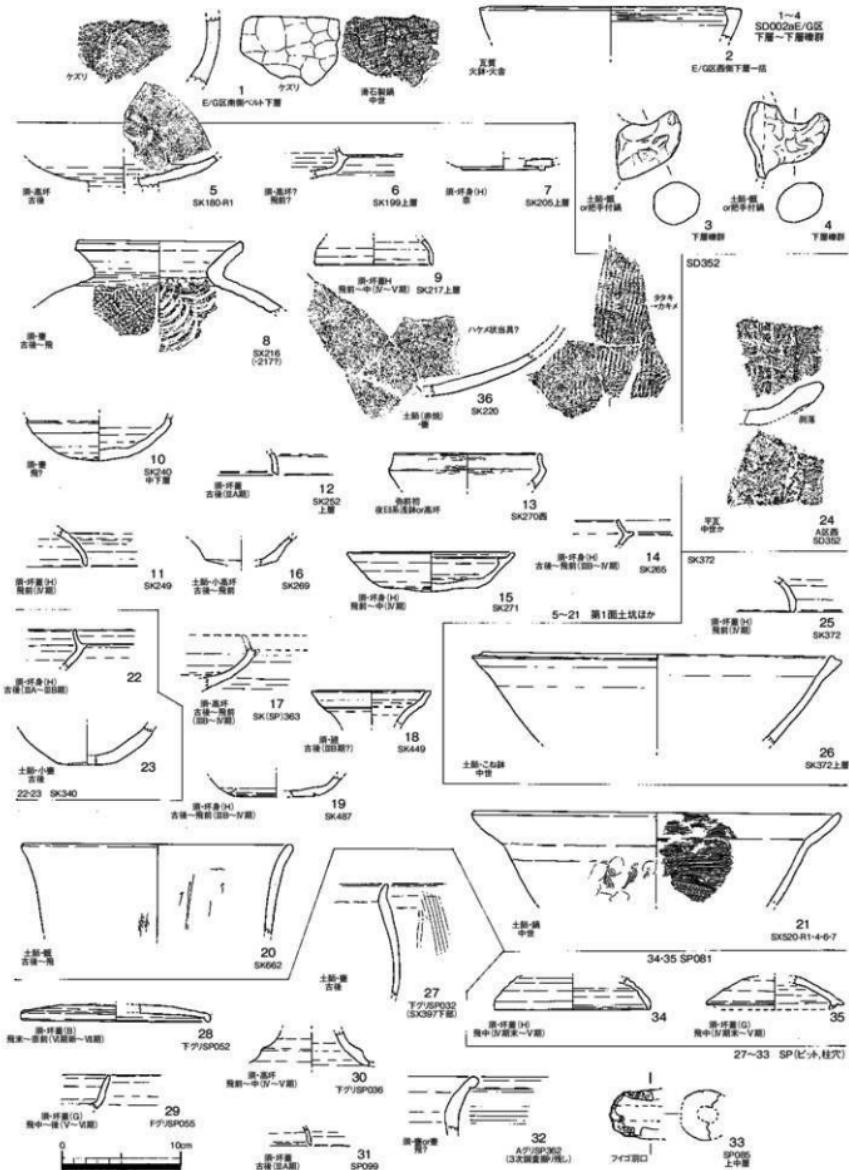
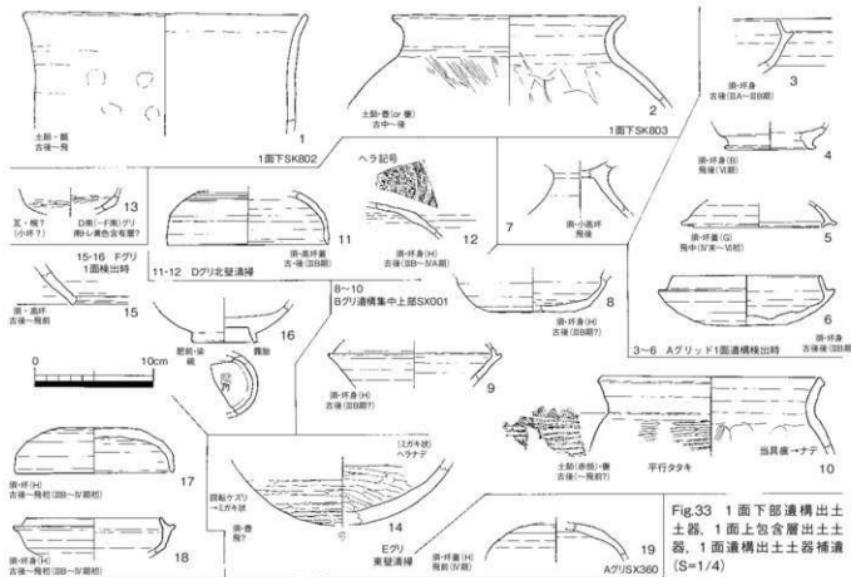


Fig.32 1面遺構出土土器V（補遺）（1/4）※石製容器含む



以上、<凡例>（31頁）に記したのみしか出土土器・陶磁器類について説明できないが、「韓式系土器」（Fig.23）についてのみ、簡単に説明しておく。これらを「韓式系」とした理由は、いわゆる、より「土師器」的な「赤焼土器」（中島圭2010）と異なり、より当時の朝鮮半島の軟質（赤焼）土器と同じ、あるいは近い要素があるからである。たとえば鉢形土器における平底（ロクロ上の方形板＝「ゲタ」痕跡がある）や、縦位平行タタキ以外に繩文タタキや格子目タタキがあること、赤焼土器や当時の須恵器にはほとんど無く、土師器でも廃れた斜位（右上）タタキがあること、赤焼土器や当時の須恵器には少ない「無文当具」（「当具A」とした）があることなどである。当具には無文

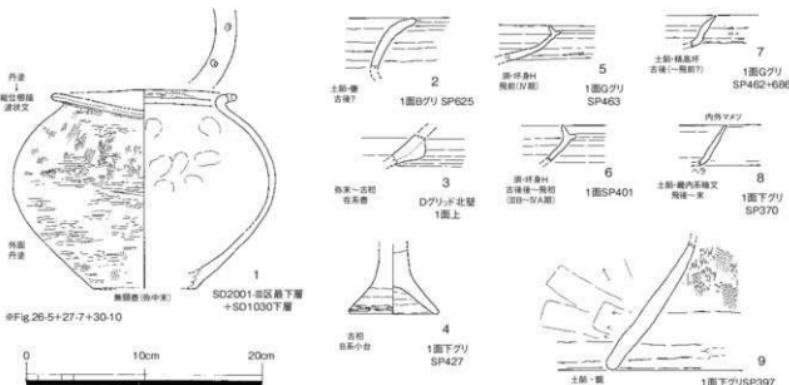


Fig.34 出土土器実測図 捕遺 (S=1/4)

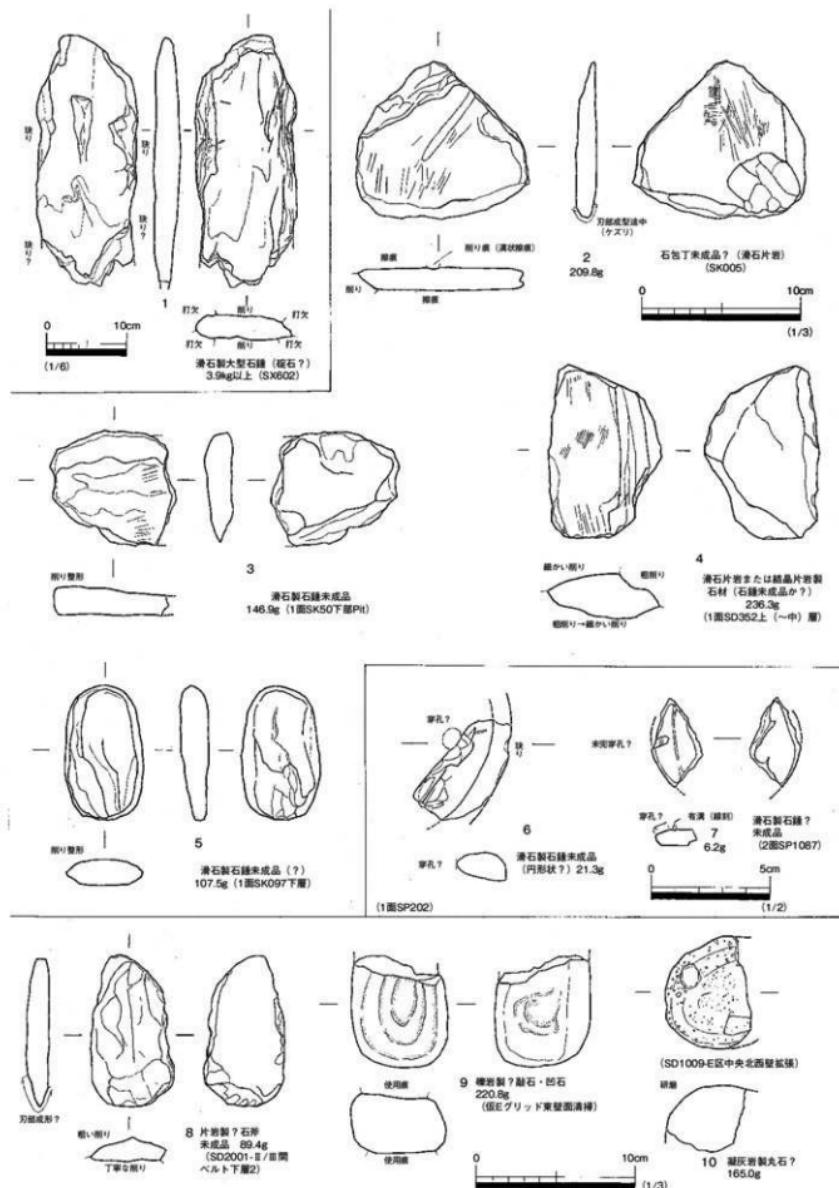


Fig.35 石製品 実測図 I (1/6, 1/3, 1/2)

以外に、当具痕跡（内面）の凹みの中に、同心円文（「当具B」とする：明瞭なものと不明瞭なものあり）があるもの、平行文（寺井誠2018）ないし半円多重弧文（「当具C」とする：明瞭なもの／不明瞭なもの）がある。ここで重要なのは、外面のタタキも内面の当具痕も多様性があるということである。平行文は次代の「赤焼土器」に引き継がれるが、縄文タタキや格子目タタキがあるのは稀である。これは、当時の朝鮮半島の特定地域ではなく、広範囲な各地の諸特徴であり（寺井誠2018）、まさに朝鮮半島各地から人々が渡来してきたことを示唆する。しかも、いくつかの遺構でみられる共伴関係は、九州須恵器編年（牛頭編年：舟山良一2008）のⅢB期（TK43併行）であることも重要である（後述）。

（2）石器・石製品（Fig.35・36）

石製品の主な遺物を図化した。出土遺構、器種、石材、主要調整、重さについては挿図中に記した。ここで特記すべきは、片岩製および滑石製の石錘ないし石錘未成品があることである（山口謙治、林田憲三教示）。特に「石錘未成品」についてはこれまでの整理あるいは現場で見過ごされてい

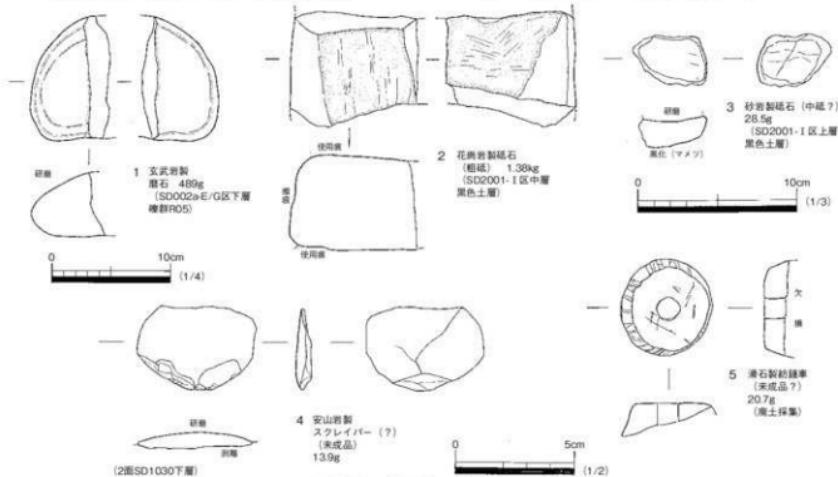


Fig.36 石製品 実測図 II (1/4, 1/3, 1/2)



る可能性がある。片岩は周囲の第三紀層の主要岩石であり、地山礫層にも多く含まれるため、注意深く観察する必要がある。滑石は、片岩層（岩脈）の一部に含まれるもので、いずれにしても在地の石材である。これらが、弥生時代だけでなく古墳時代から古代まで作られ、未完成が多いことがこの遺跡の特徴である。今後注意すべき遺物である。

（3）金属製品

Fig.37 (Ph.2) は銅鏡である。直角式細縁の和鏡で、外区は葉文（桐葉文？）、圓線（圓帶）は「へ字圓」の太いもの、内区は何らかの花文であろう。文様構成的に中世後期以降～近世前期の鏡と思われる。柄鏡となる可能性もあるが不詳である。あるいは、隣接する日吉神社創建時（近世前期？）頃の奉納品か？

III.調査のまとめ

1. 主要遺構の変遷と地域史の復元

立花寺11次調査の主要遺構は、次のような変遷にまとめられる。①弥生時代（前期？～）中期の自然流路、②弥生時代中期後半～末、後期初頭までの水路および井戸（+おそらく集落と周囲に水田城）、③断絶期（丘陵上に弥生時代後期前半の土器あり：Fig.21-1）、④古墳時代中期後半～後期前半の集落の部分的断続的な再開、⑤古墳時代後期中頃（ⅢA期）からの集落の継続的展開、この時期、古墳後期後半～末（ⅢB期）に韓式系土器製作・使用集団（=渡来人）が存在し、在地化して「赤焼土器」を製作するようになる（IV期初頭？）、⑥集落の再編、整地層の存在（IV期初頭）、遺構の稠密化（IV期～VI期=飛鳥時代）、⑦集落の衰退と断絶（奈良時代～平安時代中頃）、⑧水路SD002の最初の掘削（12世紀頃？）、以後断続的に水路再掘削し、水田生産域化か？、⑨中世後期以降に後に「日吉神社」となる土地に何らかの施設が想定、近世に神社創建。以上のようにまとめられるが、周囲の立花寺遺跡内の発掘調査成果や、周辺遺跡を含めた時期別消長、中世以降は文献史料上の成果も含めて地域の歴史を復元することが今後の課題であろう。なお、⑤の時期の「渡来人」の存在は周囲の古墳群での朝鮮半島系土器（陶質土器）の存在からも推測され、⑥の時期も南側丘陵を隔てた立花寺5・6次調査で新羅土器が多く出土していること、⑤～⑥の時期に南に接する「御笠郡大野郷」に属する古墳群（王城山古墳群、唐山古墳群など）や集落（乙金地区遺跡群、薬師の森遺跡など）でも同様の土器（韓式系土器・赤焼土器・新羅土器）の存在や「韓人池」伝承があることなどを含めて検討課題である。また、時代が遡る②の弥生時代中期後半～後期初頭においても、半島系三角形粘土帯土器、薄型三角形粘土帯土器が計2点見られたことも面白い。当地は、当時の拠点集落ではない（すぐ近くでは下月隈C遺跡および席田遺跡群が拠点集落）緑辺集落であり、その出土背景も課題となる。

2. 弥生時代の溝状遺構（水路）と井戸について

遺構の報告でも述べたが、検出した弥生時代中期末の井戸と、同時期の水路は有機的な関係があり、土器廃棄という祭祀行為が「水の祭祀」に関わるものであろうと述べたが、こうした類例や祭祀の実態解明、あるいは当地の水利と水田生産域の解明も今後の課題である。

3. 韩式系土器の出土背景について

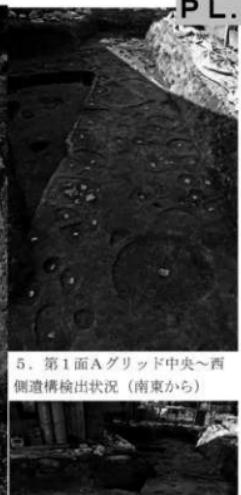
九州須恵器編年ⅢB期の暦年代は時期的に6世紀後葉であり（久住猛雄1999a）、加耶滅亡（562年）後の朝鮮半島の新羅・百濟の抗争（戦乱）による、「難民」的な渡来人が多くいたのではないか？一地域に限定できない土器の特徴（タタキ、当具、底部形態など）がそれを物語ると考える。繩文タタキや格子目タタキの存在は、「加耶」滅亡地域だけでなく、より広い地域、特に「百濟・馬韓」地域（韓国西部）からの渡来人も存在し、混住したと推測するのが妥当である。



1. 第1面北西調査区（A・Bグリッド）
調査状況（南東から）



2. 第1面F・D・B・Aグリッド調査状況
（南東から）



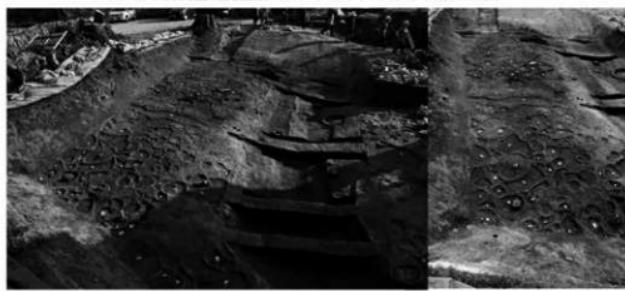
5. 第1面Aグリッド中央～西側遺構検出状況（南東から）



3. 第1面調査状況全景（Aグリッド西半除く；南西から）



6. 第1面A・Bグリッド遺構検出状況（南東から）

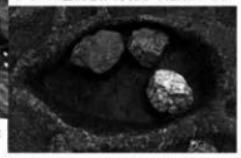


4. 第1面D・E・F・G調査状況（北東から）

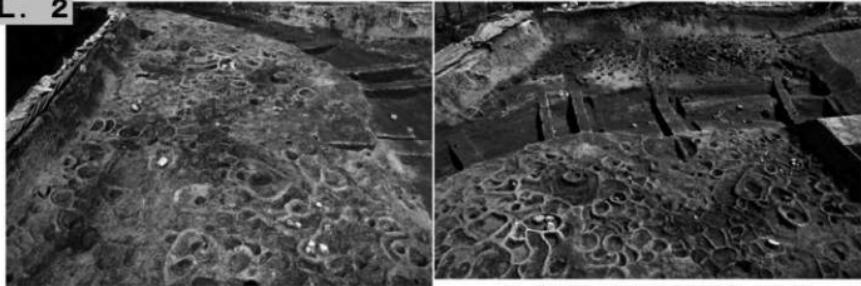
8. 第1面F・Gグリッド（SD002
以東）遺構検出状況（北東から）



7. 第1面B・C・D西・E西グリッド遺構検出状況（北東から）



9. 第1面SK012 織出土状況（西から）

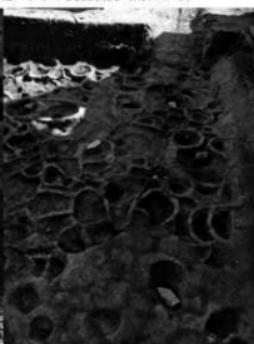


1. 第1面A東縁・B・C北・D西・E北グリッド調査状況（南西から）

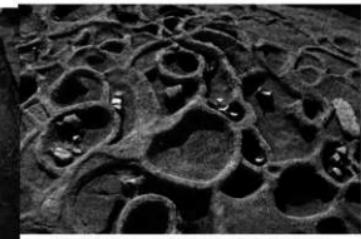
2. 第1面B～Gグリッド調査状況（西から）



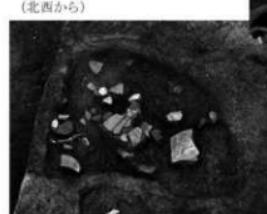
3. 第1面 SD057 下層集中状況
(北西から)



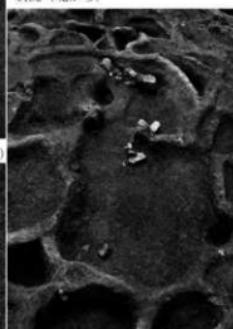
4. 第1面B南・C・E西グリッド調査
状況（北から）



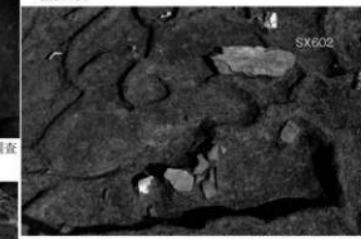
5. 第1面Gグリッド (SK002以東)
中央調査状況
(東から)



6. 第1面 SK003 遺物出土状況 (南東から)



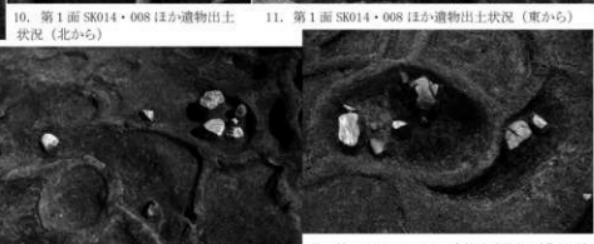
10. 第1面 SK014・008ほか遺物出土
状況（北から）



9. 第1面 SK014・SK025・SK002 遺物出土状況 (南東から)



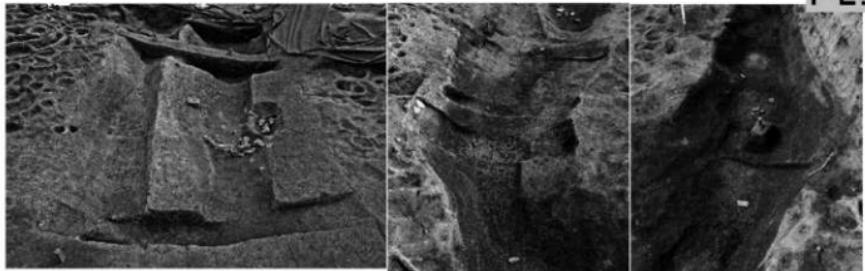
7. 第1面 SK004 遺物出土状況 (南から)



8. 第1面 SK015 遺物出土状況 (東から)

12. 第1面 SK005・143 遺物出土状況 (西から)

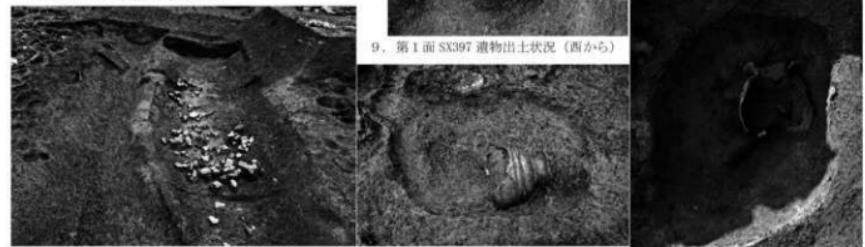
13. 第1面 SK020・021 遺物出土状況 (北から)



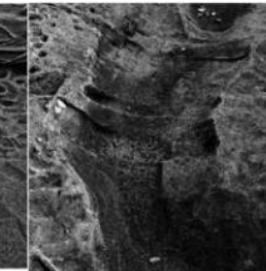
1. 第1面 SD002 a・b-E/G区掘削状況（北から）



2. 第1面 SD002 a・b-E/G区掘削状況, SD002 a下層集中出土状況（南から）



3. 第1面 SD002 a・b-E/G区掘削状況, SD002 a下層集中出土状況（北から）



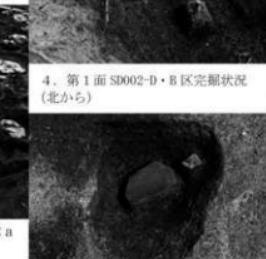
4. 第1面 SD002-d・B区完掘状況（北から）



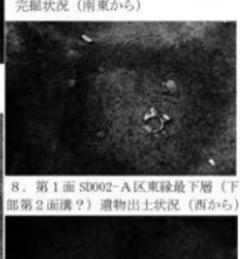
5. 第1面 SD002-A区東縁・B区完掘状況（南東から）



8. 第1面 SD002-A区東縁下層（下部第2面薄？）遺物出土状況（西から）



9. 第1面 SX397 遺物出土状況（西から）



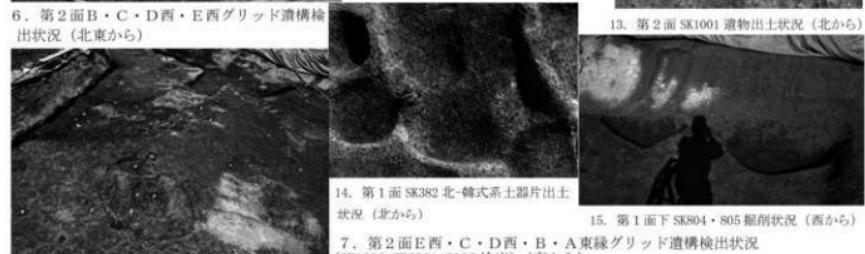
10. 第2面 SK1260 遺物出土状況（北東から）



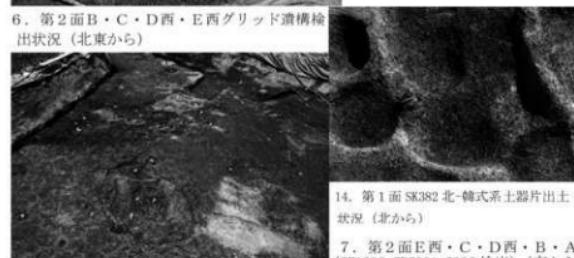
11. 第2面 SK1260 遺物出土状況（南東から）



12. 第1面下 SX801・802遺物出土状況（西から）



13. 第2面 SK1001 遺物出土状況（北から）

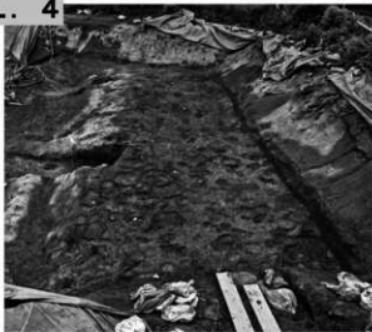


14. 第1面 SK382 北-韓式系土器片出土状況（北から）

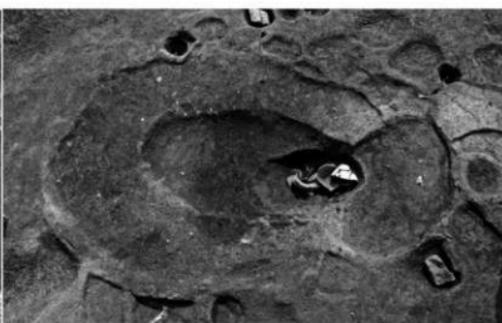


15. 第1面下 SK804・805掘削状況（西から）

7. 第2面 E・C・D西・B・A東縁グリッド遺構検出状況 (SE1002, SD2001-2003検出) (南から)



1. 第2面F・Gグリッド (SD002より東側) 遺構
検出状況 (南から)



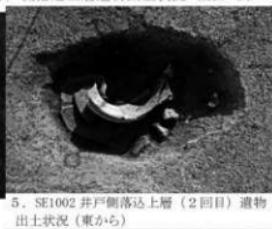
3. 第2面 SE1002 上面検出・井戸側落込上層遺物出土状況 (東から)



2. 第2面F (・G北) グリッド遺構検出状況
(南東から)



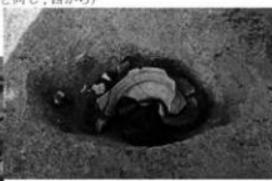
4. SE1002 井戸側落込上層遺物出土状況 (3
と同じ; 西から)



5. SE1002 井戸側落込上層 (2回目) 遺物
出土状況 (東から)



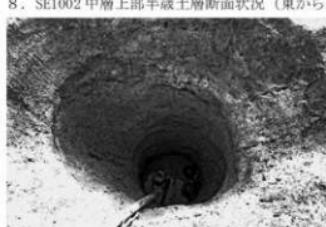
8. SE1002 中層上部半乾土層断面状況 (東から)



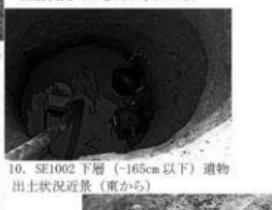
6. SE1002 井戸側落込上層 (2回目) 遺物
出土状況 (5と同じ; 西から)



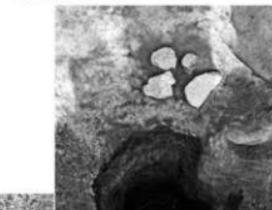
7. SE1002 井戸側落込上層 (3回目) 遺物
出土状況 (西から)



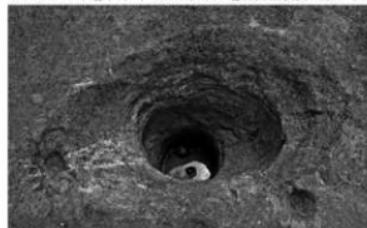
9. SE1002 下層下部 (-165cm以下) 遺物出土状況 (東から)



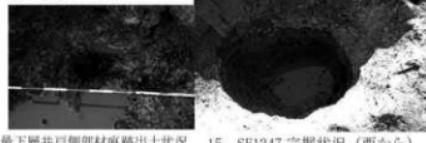
10. SE1002 下層 (-165cm以下) 遺物
出土状況近景 (東から)



12. 第2面 SE1247 井戸側落込? 挖削状況 (掘方上部; 緯集中; 西から)



13. SE1247 井戸側落込? 挖削状況 (東
側上部掘方拡張; 西から)



14. SE1247 最下層井戸側部材痕跡出土状況
(北から)

15. SE1247 完掘状況 (西から)

11. 第2面 SE1002 最下層上土器出土状況 (西から)



1. 第2面北西調査区（Aグリッド）調査状況全景（南西から）



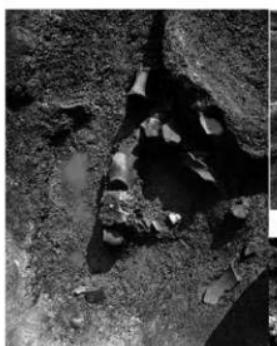
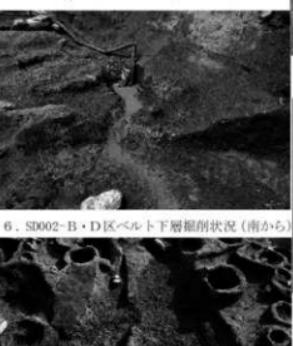
2. 第2面 SB01（南西から）



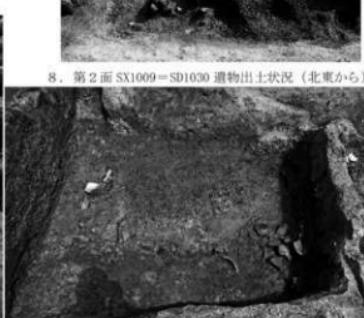
3. 第2面 SP1047（西から）



4. 第2面 SP1015（北西から）

5. SD002-G区中央第2面下東西トレンチ地
山堆積（北から）9. 第2面 SX1009 賽物集中出土状況
(北東から)

6. SD002-B・D区ベルト下層掘削状況（南から）

7. 第2面 SD1035 (SD2003 面上層) 賽物出土
状況（北から）12. 第2面 SX(SD)1038 (SD2001
上層) 賽物出土状況（東から）

13. 第2面下 SD2001-III区下層出土状況（南から）



11. SD2001-IV区上・中層出土状況（南東から）



報告書抄録

ふりがな	りゅうげじアーリュウジイセキダイ11じちょうきのほうこくー
書名	立花寺7
副書名	—立花寺遺跡第11次調査の報告—
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1379
編著者名	久住猛輝
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 電話番号 092-711-4667
発行年月日	西暦2019年3月26日

遺跡名ふりがな	りゅうげじイセキダイ11じちょうき
遺跡名	立花寺遺跡第11次調査
所在地ふりがな	ふくおかはしかたくりゅうじ2ちょうめ694-1, 694-3, 694-4, 694-5, 694-6, 696ばんち
遺跡所在地	福岡市博多区立花寺2丁目694-1, 694-3, 694-4, 694-5, 694-6, 696番地
市町村コード	40132
遺跡番号	0038
北緯	北緯33度33分59秒 (世界測地系)
東経	東経130度28分9秒 (世界測地系)
調査期間	20160226～20160708
調査面積 (m ²)	325.2 m ²
調査原因	保育園建設工事

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落	弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代、平安時代、室町時代、安土桃山時代、江戸時代	調査面は主に2面あり、第1面では、古墳時代後期ないし飛鳥時代以降までとのピットおよび土坑多数、溝(水路)数条、第2面では古墳時代中期から飛鳥時代および奈良時代中期から後期のピット・土坑多数、掘立柱建物、井戸2基、構造物と井戸の関係が複数見られた。第2面の弥生時代中期末の水路と井戸の関係が複数深い。また、遺構が極めて稠密であったことが特記される。	出土遺物は、絶縁パンケース40箱がある。壳生土器、土瓶器、羽衣器、瓦器、輪入陶磁器、国産陶磁器、瓦質土器、石器(弥生時代)、滑石(結晶片岩含む)、石材(石鎚木成品など)、木片など有機質遺物がある。朝鮮半島系土器(粘土器)2点がある他、古墳後期後半に属する韓式系軟質土器が多数見られたことが特筆される。後者は、「赤焼土器」に変容する様相が推定できる。その他、弥生時代中期末前後の土器群が多く、その中には丸捻無颈壺の体部上半に「継位帯捺波状文」が施された珍しい土器も見られた。	弥生時代中期から江戸時代初期までの地域史を復元するに於ける遺構・遺物を検出した。弥生時代中葉を半へ後期初頭は、水路と井戸の開発、出土土器群が豊富にあり、また半島系粘土土器の出土が特記される。古墳時代後期から飛鳥時代の遺構の多さ、この時期の「韓式系土器」が集中して出土したことは、渡来人の移住とその背景としての朝鮮半島情勢までを考慮に入れねる必要が生じた。周囲の遺跡には古墳時代後期から飛鳥時代の郵船半島系土器が多く、埴輪の中での渡来人の存在が証明が可能であるが、その歴史的意義や歴史的展開の解明が今後の課題であろう。また、中世初期に焼削されたと推定される水路は、長く維持され、江戸時代初期まで何度も焼削されたことが調査の結果判明した。その焼削は、片岩および滑石製の大小の石罐およびその未成品が多く見られ、未成品ないし半製品製作遺構としての性格も考える必要性が生じたと言える。

立花寺7

—立花寺遺跡第11次調査の報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1379集

2019年3月26日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 三栄印刷株式会社
福岡市博多区千代1-6-1

